

2024年2月1日

みずほディーラーズアイ (2024年2月号)

みずほ銀行

目次

米ドル相場	2	韓国ウォン相場	9
ユーロ相場	4	台湾ドル相場	10
英ポンド相場	6	香港ドル相場	11
豪ドル相場	7	中国人民元相場	12
カナダドル相場	8	シンガポールドル相場	13
		タイバーツ相場	14
		マレーシアリング相場	15
		インドネシアルピア相場	16
		フィリピンペソ相場	17
		インドルピー相場	18

* 見通しは各ディーラーのビューに基づきます。

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。

米ドル相場

予想レンジ: USD/JPY 145.00 ~ 150.00

金融市場部 為替営業第一チーム 尾身 友花

■ 先月の為替相場

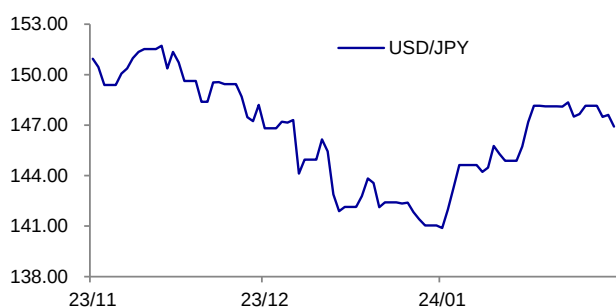
年初2日は141.12円でオープンし、141円台半ばにじり高推移。一時142円台に乗せたが米金利の低下に連れ142円を割り込んだ。3日は142円を挟み方向感なく推移した後、一時143円台後半に上昇した。4日は米12月ADP雇用統計や米新規失業保険申請件数の良好な結果を受けて、一時144.85円に続伸。5日は円売り相場の中、週高値を更新しながらの取引となった。週初8日は144円台前半へじり安。海外時間は、米12月NY連銀調査の1年先期待インフレ率が低水準となり、一時143円台後半に続落。9日は一時143円台半ばに下落したが、海外時間はドル買い相場の中で144円台半ばに反転上昇。10日は本邦11月毎月勤労統計の弱い結果を受け、円金利が低下する流れに合わせ145円を目指す展開。海外時間は米金利上昇にも連れる形で146円を目指す上昇。11日は145円台半ばへじり安。海外時間は、米12月消費者物価指数(CPI)が市場予想を上回り一時146.41円に急伸するも、145円台前半に反落した。12日は引き続き145円台での取引となった。週初15日、ドル/円は上に往って来いの展開。16日は米金利上昇を受け146円台に乗せた。海外時間はウォラーFRB理事のタカ派発言を受けた米金利続伸につれ、147円台に上伸。17日はドル買いから148円を目指す展開。海外時間は米12月小売売上高・鉱工業生産の良好な結果を受け、昨年11月末以来の高値148.52円に上伸。18日は一時148円を割り込んだが、米新規失業保険申請件数の強い結果を受け148円台を回復。19日は148円台での取引が継続。週初22日は148円を挟みレンジ推移。23日は、日銀金融政策決定会合の現状維持が伝わると148円台後半に上伸も148円付近に値を戻した。海外時間は、植田日銀総裁会見がマイナス金利解除に向け前向きと解釈され、147円付近に急落。その後は米金利上昇から148.70円に反転上昇。24日は、円金利上昇を受け148円を割り込んだ。海外時間は、米金利低下で一時146.65円に続落も、米1月PMI(速報)の強い結果を受けた米金利上昇から147円台半ばに戻した。25日、ドル/円は147円台後半でじり高。米新規失業保険申請件数の弱い結果を受けた米金利低下から147円台前半に下押す場面もあったが、米金利の反発を受け147円台後半に値を戻した。26日は、米12月・PCEデフレーターの結果は予想通りとなるも、個人支出が市場予想を上回り、ドルが下支えされたことで、ドル/円は148円台前半まで上昇した。週初29日はドル買いの流れは続かず、147円半ば付近までじりじりと値を下げた。30日は、米1月・消費者信頼感指数などの指標結果が好調で一時148円手前まで急進する場面も見られた。31日は147円台での取引が継続。

■ 今月の見通し

今月のドル/円相場は高値圏でのみみ合いを予想。具体的には150円を目前にややドル買い円売りの流れとなりそう。背景としては、日米の金融政策差によるドル買い円売りが継続すると考えており、日銀のマイナス金利解除や米国の利下げ開始時期を巡る思惑によるドル売り円買いの流れを凌ぐと考えている。日銀は昨年度末には早期マイナス金利解除が見込まれていたが、今年初に起きた能登半島地震の影響などを考慮に入れマイナス金利解除の時期は後ずれとなったのではないかと考えている。また、米国の利下げ開始については、一部インフレ指標で減速がみられる一方で、雇用や消費関連指標で好調な指標結果が見られ、利下げ時期を示唆するにはやや早い印象を持っている。これらを勘案すると、昨年末に見られた早期金融政策変更の思惑によるドル売り円買いの流れは一旦弱まり、現行政策にみられる日米金融政策差を背景としたドル買い円売りの流れが継続し、ドル/円は150円付近で強含む流れを予想する。

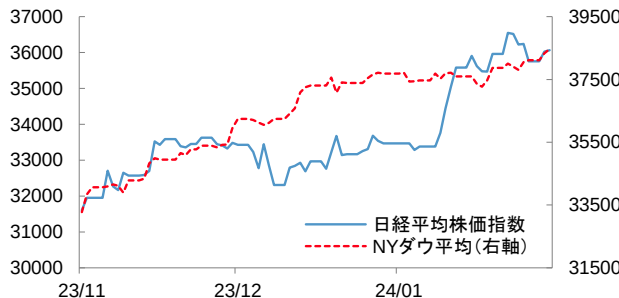
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
1/4	米ISM製造業景況指数	12月	47.1	47.4	46.7
1/4	米ADP雇用統計	12月	125K	164K	101K
1/5	米非農業部門雇用者数変化	12月	175K	216K	173K
1/5	米失業率	12月	3.8%	3.7%	3.7%
1/6	米ISM非製造業景況指数	12月	52.5	50.6	52.7
1/11	米CPI(前年比)	12月	3.2%	3.4%	3.1%
1/12	米PPI(前年比)	12月	1.3%	1.0%	0.8%
1/20	ミシガン大学消費者マインド	1月	70.1	78.8	69.7
1/23	日銀政策金利	-	-0.1%	-0.1%	-0.1%
1/31	FOMC政策金利	-	5.50%/5.25%	5.50%/5.25%	5.50%/5.25%

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ドル/円 見通しまとめ

ブル	6名	150.00 ～ 145.00	ベア	10名	149.00 ～ 143.25
----	----	-----------------------	----	-----	-----------------------

※ レンジは中心値

宮地	ベア	149.00 ～ 142.50	米国の利下げに対する思惑や日銀の金融政策変更に対する期待感が高まり、ドル円の上値の重い展開を予想。また、各国の金融政策がハト色が強まる状況下、クロス円の反落にも注意したいところ。	松永	ベア	149.00 ～ 143.50	FRBが拙速な利下げに動くとは想定しづらいものの、米国経済指標の結果次第では、3月FOMCでの利下げ期待が再び高まる可能性も。1月の急速な円安うけたドルの反動安には警戒したい。
河合	ブル	150.00 ～ 145.00	2月は日米共に中銀イベントなく、経済指標を眺めつつ、明確な方向感の出ないレンジ相場を想定。主要高官の金融政策に関するコメントで仮に145円近辺まで下落する場合でも、相応の押し目買いフローを想定し、底堅い推移を予想。	田川	ブル	149.80 ～ 145.00	FOMC次第。Fedから新たなヒントがなければ横ばいの展開を想定。米3月利下げ観測が今以上に進むとも思えず、日銀マイナス金利解除予想が高まるとも思えず、どちらかと言えばブルに一票とした。
川端	ベア	149.50 ～ 144.50	FRBは利下げ時期を探る局面だが、FOMCで方向性が明確にならない限り12月同様、指標に振られる可能性が高い。他方、公表された1月日銀会合の主な意見により日銀のマイナス金利解除も意識され易くドル円の上値は押さえられる。	上遠野	ベア	149.00 ～ 143.50	主要中銀イベントが少なく、また中華圏の春節休暇もありやや閑散ムードの中、年初来上昇相場の調整入りをみておきたい。日銀の3-4月マイナス金利解除への思惑も根強く上値は重い。
加藤	ブル	149.00 ～ 144.00	予想比値幅が出たが調整的なドル買いは大方終了と予想する。あくまで春闘が重要との見方は変わらないので今月も調整相場の域を出ないと思うが、ある程度ドル買いをこなし今月は頭重になると予想する。	小林	ベア	149.00 ～ 143.00	米経済の底堅さは確認できている一方、インフレの落ち着きも確認されつつある状況下、米利下げへのフェーズとなっており、日銀のマイナス金利解除への具体策も出た場合は大幅な円高進行に留意したい。
山崎	ブル	152.00 ～ 145.00	ドル円は上方向を予想する。引き続き証券投資による円売り圧力は相応にあるものと想定。円売りによる円安から上昇を見込む。米国の金融政策の変更やBOJからの利上げタイミングに関する発言には注意したい。	鈴木	ベア	150.00 ～ 143.00	米国経済は依然堅調も、遅かれ早かれ訪れる利下げ局面を見据え、ドル円は上値の重い値動きか。3月会合での政策修正を完全否定していない日銀関連のヘッドラインにも注意が必要。
伊藤	ベア	150.00 ～ 143.00	米インフレ減速を背景に米利下げが意識される展開へ。今後の指標次第だが、3月利下げ期待は未だ根強い。また、日本サイドでも賃上げ機運の高まりとともに日銀の政策修正期待も高まりやすく、ドル円の上値は重くなるだろう。	大熊	ブル	150.00 ～ 145.00	日銀のタカ派寄りな姿勢が確認されてもドル/円の底堅さは継続。主要各国の3月の中銀会合までは方向感出にくいと思われる一方で、足元の米経済指標の堅調さを鑑みれば、引き続き底堅い推移を予想。
尾身	ブル	150.00 ～ 145.00	今月も米国の高い政策金利の維持と、日銀の金融緩和政策維持によりドル/円はドル高円安傾向が維持されると予想。但し、米利下げへの思惑が強まっており上値は限定的。	西	ベア	149.00 ～ 143.00	足許では円安回帰しているものの、米国では次第にインフレ鈍化を受けた利下げ期待が強まり、本邦では賃金上昇圧力を背景としたマイナス金利解除期待が高まるだろう。急速な円安進行を受けた反動もあると見られ、上値は重い。
山口	ベア	149.00 ～ 144.00	米国の景気は底堅いがインフレ鈍化もきちんと確認できており、米年内利下げ観測は燻り続けると予想する。日銀によるマイナス金利解除の可能性も残されていることからドル円は上値重く推移すると予想。	伊藤(基)	ベア	149.00 ～ 144.00	米国での物価上昇圧力は均してみれば着実に鈍化しており、FRBは年の前半には利下げを行うだろう。一方で、日銀はマイナス金利解除に向けて一歩ずつ準備を進めている印象。そうした中では、ドル円には低下圧力がかかるとみている。

ユーロ相場

予想レンジ: EUR/USD 1.0650 ~ 1.0950
EUR/JPY 155.00 ~ 163.00

金融市場部 グローバルFIチーム 山崎 浩幸

■ 先月の為替相場

【1月のEUR/USDは軟調に推移】

1月2日週のEUR/USDは1.1046でスタート。欧州時間で欧州株・欧州債が軟調となり、一気に大台1.1000を割り込んだ。その後も北米時間も年末の株高・債券高が反転、為替市場ではドル買いが進み1.0938まで下落。翌3日は米12月ISM製造業景況指数を受けてドル買いが強まると一時1.0900を下回った。4日はもみ合い後、域内および各国の12月サービス業PMI確報を受けてじり高となり1.095台を回復。週末の米12月雇用統計が強かったことから一時的に1.09を割り込む瞬間があるも、その水準では切り替えし結局1.095付近へ値を戻した。

1月8日週のEUR/USDは、1.0950付近から上へ往って来いの展開。9日の独11月鉱工業生産が予想を下回ったことやセンチノ・ポルトガル中銀総裁の発言からじり安となり、1.0911を付ける場面が見られた。10日、シュナーベルECB専務理事が利下げの時期に関する論議は時期尚早との見方を示すと、独金利が上昇し1.0970手前まで上昇。11日は米12月CPIが市場予想を上回る結果に一時1.0930台まで下落するも、その後の米金利低下で1.0980台へ切り替えた。

1月15日週のEUR/USDは、ドルの買い戻しに押され、1.09台を割り込んだ。週初15日、1.0946でオープン。16日、ユーロ圏11月消費者期待インフレ率の鈍化に加え、米金利上昇が嫌気される中で、1.09台を割り込んだ。翌17日、良好な米経済指標を受けたドル買いを背景に一時週安値となる1.0845に下落も、その後は米金利の落ち着きもあり、1.08台後半に値を戻した。18日、一時1.09台を回復するも、1.08第後半での推移が良く19日にかけて続いた。

1月22日週のEUR/USDは、独金利の低下から下落。週初1.0893でオープン。24日に欧州株の堅調推移や米金利低下で反発すると、一時週高値となる1.0932に上昇するも、その滞空時間は短く、米金利上昇に再び1.09台を割り込んだ。25日、ECB政策理事会でラガルドECB総裁が夏の利下げ開始を示唆したことや賃金や基調的インフレ率の低下を認めたことなどから独金利が大きく低下すると1.08台前半へ下落。26日に1.08台半ば付近を回復するとその後は、同水準で動意乏しい推移が続いた。29日、30日と引き続き軟調な展開が続いている。

■ 今月の見通し

【2月も引き続き軟調に推移していくものと予想】

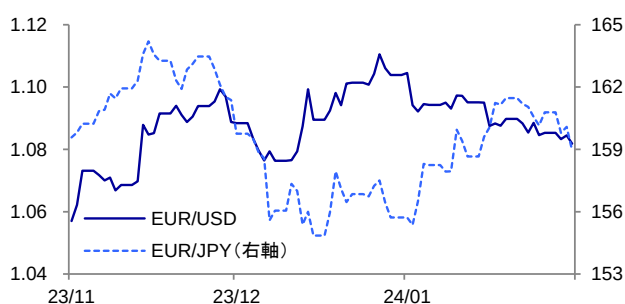
1月の値動きを見ても、金利の動向に為替相場もふらされているものと考えている。それをベースに考えたときに、ECBは2024年は利下げ方向に動いている。ラガルド総裁が夏の利下げを示唆しており、賃金やインフレ率の低下といった経済指標を確認しつつ、利下げ方向に舵を切ることは既定路線のように思われる。来月という時間軸で、このペースのみで大きくEUR安が進むとは想定しないものの、基調として下押し圧力にさらされているということだと考える。

一方の米国ということになるが、米国もやはり利下げが行われる可能性はあるものの、1月の米国経済指標に鑑みれば、欧州の利下げ圧力と比べるとそこまでではないようにも思われ、EURUSDではやはり下押し圧力が強いように考える。

加えて、イスラエル・イランをめぐる地政学的なリスクがエスカレートする局面ではユーロにとっては売り圧力の流れとなりうることから注意したい。

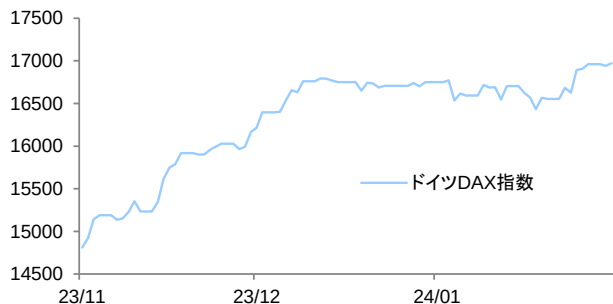
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
1/2	ユーロ圏製造業PMI	12月	44.2	44.4	44.2
1/8	小売売上高	11月	-1.5%	-1.1%	-1.2%
1/17	CPI 前年比	12月	2.9%	2.9%	2.4%
1/24	消費者信頼感	1月	-14.3	-16.1	-15.0
1/25	ECB政策金利	-	4.50%	4.50%	4.50%
1/30	GDP 前年比	4Q	-0.10%	0.00%	-0.10%

(資料) ブルームバーク

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ ユーロ/ドル 見通しまとめ 見通しまとめ

ブル	1名	1.1100 ～ 1.0700	ベア	15名	1.1000 ～ 1.0650
----	----	-----------------------	----	-----	-----------------------

※ レンジは中心値

宮地	ベア	1.0950 ～ 1.0500	日米欧のなかで、最も弱い景況感であるユーロは積極的に買い進めづらい。また、集合体故に、ECBが金融政策の転換期に対応が遅れるリスクも孕む状況下、ユーロの上値は限定的か。	松永	ベア	1.1050 ～ 1.0650	1月公表のユーロ圏10-12月期実質GDPは2四半期連続のマイナス成長こそ回避したものの、引き続き欧州経済は楽観視できない状況。FRBが大きく利下げに舵を切ることがない限り、ユーロの軟調地合いは継続しよう。
河合	ベア	1.1050 ～ 1.0700	2月は欧米共に中銀イベントなく、経済指標を眺めながら、明確な方向感の出ないレンジ相場を想定。主要高官の金融政策に関するコメントで上下する場面は想定されるが反応は限定的か。目線はベア継続。	田川	ベア	1.1000 ～ 1.0600	年末に1.11台をつける場面もあったが、ハト派な中銀の発信に反転下落。初回利下げのタイミングがfedよりもECBの方が早いとのコンセンサスの中で上値の重い展開を想定。
川端	ベア	1.1000 ～ 1.0600	低下基調のインフレ動向を受けて市場の関心は低迷する域内景況感に向かっており引き続き利下げ時期を探る局面。直近インフレ指標の反発やラガルドECB総裁の早期利下げ牽制コメントもあり、下落トレンドながらレンジ推移を予想。	上遠野	ブル	1.1100 ～ 1.0700	12月消費者物価指数の止まり感をはじめ、早期利下げを正当化出来るほどの材料は依然つかめず。織り込みを急いだ市場の見方が修正され、利下げ観測で先行する米国との対比が表れやすいか。
加藤	ベア	1.1000 ～ 1.0700	調整相場は一服したと考えるが、一方で明らかなユーロ上昇相場に戻ると言えない。3月に向けたFRBのスタンスにより注目が集まり、相場の行方を占う鍵となるであろうが、基本的には横這い推移を予想する。	小林	ベア	1.0950 ～ 1.0650	1月のECBでは政策金利据え置きとなるも、引き続き欧州経済の弱さが目立っており、インフレの落ち着きも確認できており、利下げへのフェーズヘシフト等のトピックスが出た場合、一段とユーロの軟調推移が想定される。
山崎	ベア	1.0950 ～ 1.0650	ユーロドルは下押し圧力が継続するものと考えている。昨今のインフレ率や賃金動向等でECBの利下げ期待が高まる中で、下押し圧力が継続しているものと見ている。今後、米国の経済指標には注意したい。	鈴木	ベア	1.1000 ～ 1.0500	ユーロ圏の経済は厳しい状況が続いている。米国の利下げ織り込みの剥落もある中で、具体的な利下げ時期を示したECBとの格差が目立つため、ユーロは軟調な推移になることを予想する。
伊藤	ベア	1.1000 ～ 1.0600	1月のECB理事会ではハト派据え置き。利下げは時期尚早としながらも、賃金圧力の緩和、基調インフレの減速を背景に利下げが意識される展開で上値は重い。また、外部環境に加えて2月はEURが下落しやすい季節性もある。	大熊	ベア	1.1000 ～ 1.0650	ECBによる早期利下げ懸念は後退しているものの、中東情勢の悪化やユーロ圏経済減速への懸念は燻っている。特に独景気の弱さが目立つことから、ユーロは上値重い推移を予想。
尾身	ベア	1.1000 ～ 1.0600	ECBの利下げ開始時期への思惑を巡りもみ合いが継続しそう。かかる状況下、先月末にかけてECB高官のハト派な発言が目立っており、やや上値思い展開が優勢となるのではないかな。	西	ベア	1.1000 ～ 1.0650	ECBの利下げは時期尚早であり年央以降が見込まれる。ただ、第4四半期GDPは0.0%と実態経済は脆弱であり、ユーロが弱含む時間が続くか。米国の利下げ期待が本格化するのにも時間を要すると見られ、当面は上値は重いだろう。
山口	ベア	1.0950 ～ 1.0700	1月に発表されたユーロ圏経済指標は総じて弱く、さらに1月のECB声明文でもインフレ上昇圧力と単位労働コストの強い伸びについての文言が削除されており、早期利下げ開始の可能性が高まっている。ユーロは上値重く推移すると予想。	伊藤(基)	ベア	1.1000 ～ 1.0600	米国とユーロ圏の景気動向の違いを意識したい。米国景気は底堅く推移している一方で、ユーロ圏は景気後退局面に突入する一歩前まで減速しているだけに、ユーロはドルに対して弱含みの展開が続くとみている。

英ポンド相場

予想レンジ: GBP/USD 1.2500 ~ 1.2900
GBP/JPY 186.00 ~ 191.00

欧州資金部 中島 將行

■ 先月の為替相場

英ポンド相場は対ドルで上下にもみ合いながらもほぼ横ばいの動き。一方、対円、対ユーロではそれぞれ、約+4.5%、+2%弱と上昇している。年明け第1週のポンド相場は、FOMCのハト派化を受けた米金利低下・ドル安からの巻き戻しを受けて1月2日～3日には2023年末の対ドル1.2731から1.2611までいったん下落。特に、1月3日に公表されたFOMC議事要旨では、12月13日の会合後にパウエルFRB議長が記者会見で「今会合では利下げのタイミングを協議した」と述べた際に感じたほど、利下げに前向きな姿勢は示されなかった。1月4日は小動かな展開となった一方、5日は一転して上下に振れ幅の大きい展開に。ロンドン時間午前中にはユーロ圏12月消費者物価指数(HICP、速報)が公表され、前年比+2.9%と前月の同+2.4%から加速したことを受けてユーロ買いドル売りに。ポンドもこの流れに乗る形で上昇。もっとも、ロンドン時間午後には公表された米12月雇用統計と、米ISM非製造業景気指数は強弱まちまちな内容であり、ポンドの対ドル相場は上下に往って来いの展開となった。

第2週は、11日公表の米12月消費者物価指数(CPI)の市場予想上振れに伴うドル上昇、12日公表の米12月生産者物価指数(PPI)の下振れに伴うドル下落、と主に米経済指標の動向によって大きく左右される展開となったが、1週間を通してみれば方向感に乏しく、ほぼ横ばいの展開となった。

第3週はグローバルなドル高を受けて対ドルで下落した一方、対円や対ユーロなど他のG10主要通貨に対しては上昇した。17日に発表された英12月CPIが前年比+4.0%と11月の同+3.9%から伸びが加速し、同+3.8%への減速を見込んでいた市場予想を上回ったことがポンドを押し上げた格好となった。

第4週は、対ドル・対円で上値の重い展開となった一方、対ユーロでは上昇した。25日、ECB政策理事会の記者会見において、ラガルドECB総裁は利下げ開始時期は夏の「可能性が高い」としたスイス・ダボスでの見解を堅持すると述べたほか、域内のインフレのトレンドにおける進展を認める発言が目立った。同日に発表された2023年10～12月期の米GDPが予想を大きく上回る結果となったこともあり、ドルがユーロに対して大きく上昇し、ポンドもやや巻き込まれる形で対ドルでは上値が押さえられた。

■ 今月の見通し

英ポンド相場は、イングランド銀行(BOE)の利下げのタイミングが、米国連邦準備制度(Fed)や欧州中央銀行(ECB)よりも遅くなり、かつ利下げのスピードも緩やかなものに留まるという見方が引き続きサポートになるだろう。

まずは、本稿執筆時点ではまだ詳細が明らかになっていない1月31日(水)の米国連邦準備制度理事会(FOMC)の金融政策発表が重要であろう。市場では3月にも利下げ開始、という期待が燃えるなか、物価・景気に対するFOMCの判断が注目される。2023年10～12月期の米実質GDP成長率の強さを考慮すれば、早期利下げは選択肢にならないのではないかと感じられるが、FOMCはソフトランディング(景気の軟着陸)を確実なものにするための予防的利下げを行うのではないかとの見方も根強い状況だ。

ユーロ圏では、ECBの1月会合でのラガルド総裁のハト派姿勢を受けて、2月1日(木)に控える1月分HICP速報値が注目される。12月はエネルギー価格の寄与度の高まりを受けてCPIは再加速したものの、ECBが指摘する通りこれは一時的となる公算が大きい。サービス価格を中心に、インフレの減速軌道が鮮明となるかが注目される。

英国では、2月1日(木)にイングランド銀行の金融政策発表を迎える。政策金利は据え置きとなる公算だが、前会合での3つの利上げ票が減るかどうかが焦点となろう。景気の減速の兆しが強まるなか、インフレ抑制から景気配慮へとBOEのスタンスがシフトする可能性が注目される。もっとも、賃金の高止まりのリスクなどを勘案すれば、他の主要中央銀行のように、当局者発言を機に早期利下げ観測が高まる展開も想定しにくい。金融政策のスタンスの観点からは、英ポンドは特に対ユーロではサポートされる展開となりそう。

対円では引き続き、日本銀行(BOJ)の金融政策正常化観測が攪乱要因となる。1月会合での植田総裁は、景気・インフレの見通しに対し前向きな印象を受けた。もっとも、日本の金利が欧米対比で低水準で推移する状況には当面、変わりがないと見られ、BOEの高金利政策がしばらく維持されるとの見方が強まればポンド円は節目の190円突破の可能性もあるだろう。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

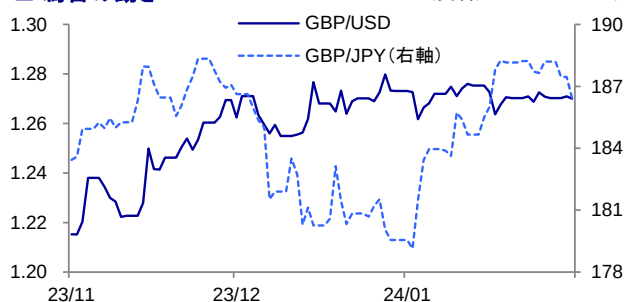
『当地で定番のパーティ事情』

長男を現地校に通わせているのですが、誕生日会を大々的にやることに驚かされます。日本だと、仲の良い友達を何人か家に招待することが一般的かと思いますが、こちらだと、人によってはクラスのほとんどの同級生に招待状を出し、どこかの会場を借りて、スポーツあり、食事会ありの大掛かりなものを企画して、子供の誕生日を祝います。

昨年3月にロンドンに来て以来、息子が招待を受けたものの中では、サッカー場、ボウリング場、トランボルジム、を借りたものがありました。私の息子も2月に誕生日を迎えるので、今から会場の選定や、招待状の作成が大変そうです。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
1/12	鉱工業生産(前月比)	11月	0.3%	0.3%	-1.3%
1/12	製造業生産(前月比)	11月	0.3%	0.4%	-1.2%
1/16	週平均賃金(前年比)	9-11月	6.80%	6.50%	7.20%
1/17	CPI(前年比)	12月	3.80%	4.00%	3.90%
1/18	RICS住宅価格指数	12月	-36%	-30%	-41%
1/19	小売売上高(前月比)	12月	-0.5%	-3.2%	1.4%
1/24	製造業PMI	1月	46.7	47.3	46.2
1/24	サービス業PMI	1月	53.2	53.8	53.4
1/30	不動産承認件数(千件)	12月	53.0	50.5	49.3
1/31	ネーションワイド住宅価格指数(前月比)	1月	0.1%	0.7%	0.0%

豪ドル相場

予想レンジ: AUD/USD 0.6440 ~ 0.6840
AUD/JPY 95.80 ~ 98.00

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 川口 志保

■ 先月の為替相場

1月の豪ドルは年明け、0.68台前半でスタート。月前半は行き過ぎていた早期利下げ織り込みが後退する動きに米金利が上昇し、ドル買いが強まり重く推移。5日、米12月雇用統計が予想を上振れた事でも更に早期米利下げ期待後退の流れに寄与し、一時0.66台半ばまで下落した。11日、米12月CPIが予想を上振れ、米金利上昇。ドル買いから豪ドルは一時0.6648まで下落。15日、中国人民銀行が1年中期貸出金利を予想外に据え置いた事で中国債券利回りが上昇し、人民元買いとなると豪ドルは一時0.6703へ上昇。翌16日は続かず、弱含む豪12月家計支出を横目に0.66台後半まで下落し、翌16日には0.6640にあった支持線を下抜けした。またウォラーFRB理事の早期利下げけん制発言を受けた米国債利回りの上昇を受け、豪ドルは0.66台割れ。17日、中国10～12月期GDP(前年比)が政府の2023年GDP成長目標の5%を超えたが、同12月不動産投資や居住用不動産が振るわず、上昇する米金利を横目に0.65台前半へ下落した。米12月小売売上高は大幅な伸びを記録し、ドル買いが加速すると豪ドルは0.6525まで下落。その後は月末にかけて0.65台半ばから0.66台半ばのナローレンジで推移した。18日、豪12月雇用統計は失業率が3.9%で前月比横ばいとなったものの、正規雇用者数が大幅減となり、労働市場の緩和を示した事で0.65台半ばから0.6525へ下落した。但し労働参加率が低下した事で求職者数の大幅減少が示された事や0.6525に支持線があった事も手伝い、即0.65台半ばへ戻した。また米株指数が連日最高値を更新し豪ドルを支えたが、株価高値警戒感から頭を押えられる展開が続いた。23日は中国当局が中国株急落を阻止する為、支援策を検討との報道に対し豪ドルは買いの反応で0.66台へ乗せ、豪ドル円も97.80円近辺まで上昇した。日銀金融政策決定会合では特段のサプライズはなく、マイナス金利を維持した事からやや円安に推移。植田日銀総裁は会見で基調的な物価上昇率が2%目標に向けて高まっていく確度は「少しずつ高まっている」との認識を示し、これが政策修正に向けて前進していると受け止められ、円安の動きから豪ドル円は97.20円近辺まで円高が進んだ。この裏で豪ドルは0.6614まで上昇後、0.65台後半へ沈んだ。その後米債利回り上昇に伴いドルが上昇する動きとS&P500が再び最高値を付ける動きに挟まれ、豪ドルはレンジ推移が継続。24日は0.6565に控えるオプションピンに跳ね返され上昇。中国が2月5日に預金準備率を▲50bp引き下げると発表し、中国人民銀行からの流動性供給で中国需要が増えるとの憶測を背景に豪ドルが支えられた。その後はFOMC会合まで動きにくい展開が続いた。

■ 今月の見通し

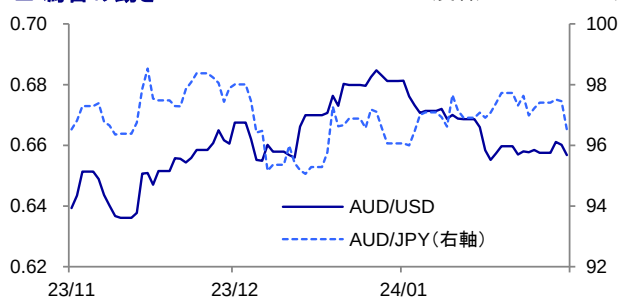
1月は行き過ぎていた市場の米早期利下げ期待が調整される形で豪ドルは0.67台から0.65台へ下落した。直近の米労働市場は引き続き底堅さを見せており、足元、3月FOMC会合時点での米利下げ織り込みは30%程度となり、米初回利下げは5月との見方が高まっている。

一方豪政策金利織り込みに関しては現在今年8月までに約1回(25bp)の利下げが織り込まれている。2024年7月からステージ3減税がスタートするが、1月25日(木)に豪政府は当初中高所得者が減税の恩恵を受ける税率ブラケットを設定予定であったのに対し、中高所得者の減税分を減少させ、低所得者層も減税の恩恵を受けられる税率ブラケットに変更すると発表した。豪財務省の試算によると変更後の税率ブラケットを施行した場合、インフレに与える影響は0.1%pt程度の上昇効果があるとしている。この減税が予想以上に消費を押し上げ、おいてはインフレが低下するスピードを鈍化させてしまうようであれば、これまでRBAがインフレ抑制の為に行ってきた政策効果が低減してしまう。また、この度、IFMが2026年以前にインフレ率をRBAのインフレターゲットレンジである2～3%まで戻す為には追加利上げが必要であると提言しており、未だ失業率が3.9%で賃金上昇圧力のある強い雇用市場を背景に、すぐさま利下げは議論する余地がないとしており、これらの理由から個人的には初回の利下げ時期織り込みが豪州でも8月以降に後ずれする可能性が高いとみる。

31日(水)発表の豪10～12月期消費者物価指数(前年比)は前月の5.4%から4.1%に低下しており、同トリム平均も下方修正された前回値5.1%から4.2%へ低下。単月の月次CPIインディケーターにおいては前月4.3%から3.4%へ下落していた。中身については前年比で衣類、靴などの落ち込みが寄与し、続いて、家具・家電の価格が軟化した。保険・金融サービス物が依然としてインフレ上昇に寄与している模様。豪初回利下げ時期織り込みが年後半であるため、ひとまず2月初旬はFOMC声明文、米雇用統計の内容を精査し、米金融政策の軌道にフォーカスしたい。足元では米株が過去最高値の水準で推移しているが、これらの資産効果や米雇用市場の強さ次第で3月FOMC時点での利下げ織り込みが現状より低下すれば、米利下げ織り込み時期が後ずれする事により米金利がサポートされる為、短期的に豪ドルは頭を押えられ易くなるとみる。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
1/18	雇用者数変化	12月	15.0k	-65.1k	72.6k
1/18	失業率	12月	3.9%	3.9%	3.9%
1/18	参加率	12月	67.1%	66.8%	67.3%
1/18	正規雇用者数変化	12月	-	-106.6k	57.0k
1/18	非常勤雇用者数変化	12月	-	41.4k	15.7k
1/30	小売売上高(前月比)	12月	-1.7%	-2.7%	1.6%
1/31	CPI(前年比)	4Q	4.3%	4.1%	5.4%
1/31	CPIトリム平均値(前年比)	4Q	4.3%	4.2%	5.2%
1/31	CPI YoY	12月	3.7%	3.4%	4.3%

カナダドル相場

予想レンジ:

USD/CAD 1.3200 ~ 1.3700
CAD/JPY 106.00 ~ 110.50

米州資金部カナダ室 芦崎 瑞穂

■ 先月の為替相場

1月は米経済が未だ強い労働市場と個人消費に支えられ底堅く、FRB関係者から早期利下げを牽制する発言が相次いだ。インフレ再燃の懸念も根強く、市場の早期利下げ観測は次第に後退。カナダドル買いをサポートする材料も乏しく、USDドルが強含みで推移する月となった。5日米12月雇用統計では失業率が3.7%と前回から横ばい、予想3.38%を下回った。新規失業保険申請件数の結果も昨年10月以来の低水準となり、米国労働市場の力強さが示された。早期利下げ観測の後退により、米長期金利が上昇。USDドル買いが1.33台後半まで進むが、米12月ISM非製造業景況指数の軟調な結果にUSDドル売りへと転じ、USD/CADは1.32台後半へと急降下した。11日の米消費者物価指数(CPI)は前年同月比3.4%上昇、予想3.2%と前回3.1%を上回り、伸びが加速。市場でのFRBによる3月利下げ開始予測が低下し、USD/CADは1.34台半ばへと反発。しかし、翌日発表された米12月生産者物価指数(PPI)が予想を下回り、インフレが鈍化している事が示されると、米金利の低下と共にUSD/CADは1.33台半ばへと値を落とした。しかし下値は底固く、17日の米小売売上高の前月と予想を上回る強い結果に個人消費の強さが示されたことや、連日のFRB理事からの早期利上げを否定するタカ派発言によりUSDドル高傾向が継続。USD/CADが1.3542をつける場面も見られた。その後はUSDドル高圧力が強くあるものの、30-31日のFOMCの前に上値は限定的で方向感にかける取引が続き、米シシガン大学消費者信頼感指数が7か月ぶりの高水準をつけ、5-10年先期待インフレ見通しが低下したことや、米中古住宅販売件数の軟調な結果を受けて、USD/CADは1.34台半ばへと反落。24日のカナダ中銀政策金利決定会合では、予想通り金利は据え置きとなった。それよりも同時に発表となった米S&P Global購買担当者景気指数(PMI、速報値)の良好な結果に市場は強く反応し、USDドル買いが加速。USD/CADは1.34台後半へと上昇。25日の米第4四半期GDPは前期比年率3.3%と前回(4.9%)からは鈍化した、予想を上回る強い結果となった。米経済の堅調な成長が好感され、USDドル買いが進むものの、FOMCの前に様子見ムードが続き、積極的な取引は控えられた。月末へ向かい、USD/CADは1.34台前半-1.34台半ばでの狭いレンジで取引が続いた。

■ 今月の見通し

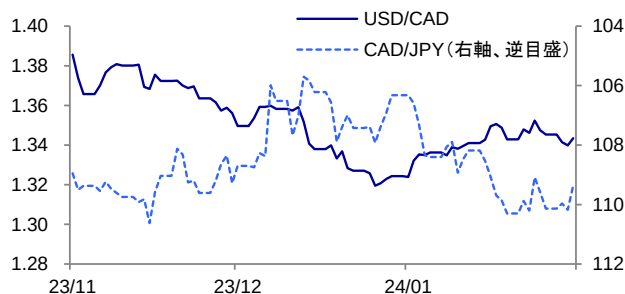
1月のカナダ中銀政策金利決定会合では金利は予想通り5.0%で据え置かれた。GDP予測は2024年は0.8%、2025年は2.4%に下方修正され、声明文からは「必要に応じ政策金利を引き上げる用意がある」という文言が削除された。カナダも米国も利下げ路線であることに変わりはないが、市場の注目は利下げをするタイミングで、市場は米国経済指標の結果には敏感に反応し、その時期を探っている。今のところ市場では米国の利下げが5月、カナダは6月開始になるとの予想が高まっている。昨年はカナダの移民受け入れの数が過去最高だったにも関わらず、カナダ経済の第2、3四半期はマイナス成長が示されている。またカナダでは200万件もの住宅ローン更新が2024年と2025年に控えており、カナダ人の多くは、日々の生活の中で、既に景気後退を感じており、個人消費の減速が顕著に示されている。カナダの方が米国よりも利下げを先に行うのではないかととの予想もあり、4月に利下げ開始との予想も根強くあるので注意したい。しかし12月のカナダ消費者物価指数(CPI)は総合とコア共に中銀が目標とする2%からは遠く、マックレム総裁からはインフレの動向次第では利上げが必要になる可能性もあることが示されている。カナダの12月のインフレ指標は悪化しているように見えたが、これは金利上昇による住宅ローンの利払いと家賃の上昇が大きく占めている為で、過去3か月で非常に高い伸びを示していた食料品などのカテゴリーのインフレ率は低下している。今後はインフレ鈍化が進むとの見方もあるが、平均時給が4-5%で高止まりしていることに加え、中国の景気刺激対策や中東での地政学リスクの高まりによる供給懸念に原油価格がやや上昇しており、今後のインフレ加速への影響が懸念されている。2月も変わらず利下げ時期を探りながら、米経済指標結果を受けての値動きが続くと思われる。カナダの景気減速がデータの各所に見られ、USD/CADの下値は底固いと思われるが、原油価格上昇でのカナダドル買いには注意したい。引き続きFRBの早期利下げ牽制が続くと予想され、USD/CADは1.32-1.37での推移を予想する。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地で定番のパーティ事情』
カナダで定番のパーティーと言えば、やはりポットラックです。参加者がそれぞれ食べ物を持ち寄り開かれるカジュアルなパーティーです。主催者だけに準備をさせて負担をかけることがないところも良いところ。そして誰が何を持ってくるか分からないお楽しみ感もあります。カナダは多民族国家なので、色々な国の郷土料理を食べることもできます。それぞれの家庭でアレンジされ、代々継承されたと思われる料理もあり、お店では決して味わえない、それはそれは美味しいにも出会えることもあります。今でも昔にポットラックで味わったフィリピンのカサバケーキやベトナムの春巻き、エンペナーダ、イチゴのカスタードタルトなどを思い出すことがあります。とは言え、ポットラックに持っていくものは手作りの料理である必要は全くなく、気負いせず、デリバリーのピザやお店で買ったパイなどを持参するのも、あります。何といってもピザは救世主。”なんだ、またピザか、”と心の中で呟いても、結局は美味しく食べてしまいます。宗教で食事規制がされていないチキンを使った料理を持参する人たちが多くのように思います。また、ポテトサラダやパスタサラダも、多くの人に好まれる無難な一品で、あるポットラックパーティーに行った時は、ほとんどの参加者がポテトサラダを持参し、ポテトサラダの食べ比べ会になったことも。そんなハプニングも楽しく、料理を通じての異文化交流をできるところがカナダのポットラックの特徴。もしかしたらこの世で一番美味しいと思える料理に出会えるかもしれません。

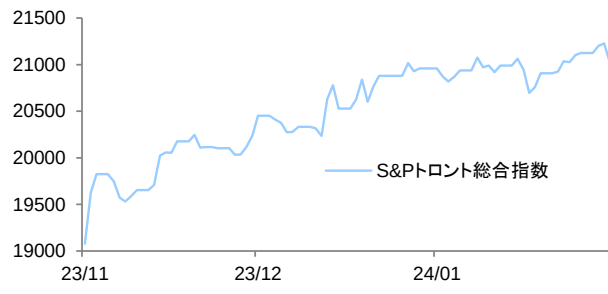
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
1/2	S&Pグローバル・カナダ製造業PMI	12月		45.4	47.7
1/5	雇用ネット変化率	12月	15.0K	0.1k	24.9K
1/5	失業率	12月	5.9%	5.8%	5.8%
1/9	貿易収支	11月	2.00b	1.57b	3.20b
1/9	住宅建設許可(前月比)	11月	-1.4%	-3.9%	3.0%
1/15	製造業売上高(前月比)	11月	1.0%	1.2%	-2.8%
1/16	CPI(前年比)	12月	3.4%	3.4%	3.1%
1/16	CPI 季調前(前月比)	12月	-0.3%	-0.3%	0.1%
1/19	小売売上高(前月比)	11月	0.0%	-0.20%	0.5%
1/24	カナダ銀行翌日物貸出金利	1/24	5.00%	5.00%	5.00%

韓国ウォン相場

予想レンジ:

USD/KRW	1290	～	1350
KRW/JPY	10.75	～	11.49
JPY/KRW	8.70	～	9.30

(注) 100韓国ウォンあたりの対円レート

東アジア資金部ソウル資金室 山内 脩平

■ 先月の為替相場

1月のドル/ウォン相場は月前半は上昇推移、その後は高値圏で揉み合い推移となった。年初のドル/ウォンは1,293.0ウォンでオープン。年末は輸出勢のフローによりややウォン高推移も、その反動からウォン安が進行し1,300ウォンを上抜け上昇。その後もFed高官や良好な米経済指標結果を背景に米早期利下げ期待の後退が進み、ドル/ウォンは堅調推移。5日には、北朝鮮による韓国西海へのミサイル発射を受け、リスク回避の動きからドル/ウォンは1,317.2ウォンまで急騰した。その後、米国時間に発表された雇用統計は良好な結果に。翌8日以降も底堅い推移が続き1,320ウォン台まで上昇した。11日のBOK会合では、市場予想通り政策金利の据え置きを決定。声明文で追加利上げの可能性についての文言が削除されたものの、李総裁は利下げへの言及は時期尚早との慎重スタンスを継続。ドル/ウォンはやや上げ幅を縮小し1,310ウォン台前半まで下落した。11日海外時間に発表された米CPIは市場予想を上回るも、翌日のドル/ウォンは1,310ウォン台半ばでレンジ推移だった。

翌15日、16日は新規材料探しの相場推移となるも、中東や北朝鮮で高まりつつある地政学リスクが意識されドル買いに。その後真先に利下げの可能性を示唆してきたFRBウォーラー理事の利下げに慎重な発言が報じられると米金利が急騰。17日にドル/ウォンは一時1,346.7ウォンの月高値をつけた。その後週末にかけては韓国当局の口先介入により上昇は一服。1,340ウォン付近での推移となった。

翌22日から月末にかけては概ね1,330ウォン～1,340ウォンでのレンジ推移が続いた。月末に控えるFOMCへの様子見から同意に乏しい推移。一時中国当局が株式市場の安定化策を検討と報じられると、人民元の上昇とともにウォンが買われるも米利下げ期待の後退により下値は限定的。月末にかけては輸出勢によるドル売りフローも見られ、上値は1,340ウォン付近で押さえられた。結局、ドル/ウォンは前月比+46.6ウォンの1,334.6ウォンでクローズした。

■ 今月の見通し

2月のドル/ウォンは上値重い推移を予想。

1月のドル/ウォンは米利下げ期待の後退とともに上昇推移。1,300ウォンを上抜けて1,340ウォン台の高値をつけた。米経済・金融政策動向が引き続き注目される中で、ドル/ウォンについては上値の重い推移を想定する。

米金融政策は1月FOMCの内容次第であるも、利下げ時期が争点に。早ければ3月、遅くとも年後半以降に利下げが想定される中、経済指標の強弱や当局者発言に上下する展開となろうが、一段と米韓金利差が拡大する可能性は低く、ドル/ウォンは次第に上値を切り下げる展開となろう。BOKは1月会合で政策金利の現行維持を決定。追加利上げの可能性について文言は削除されるも、利下げについては時期尚早とした。1月のウォン安進行局面では韓国当局による口先介入が実施されたように、BOKが米国に先んじて利下げを行いウォン安を引き起こすリスクを勘案すれば、その実現可能性は低いと考えるのが自然だろう。

韓国の12月輸出額は576億ドルと前年同月比+5.1%を記録。半導体が2か月連続でプラス成長となり、月間ベースで23年の最大を更新した。23年通年の輸出額は前年比▲7.6%と半導体の業況悪化が足を引っ張るも、23年後半からは半導体輸出の回復が確認され、24年も継続する見通しであることから、貿易黒字の拡大と共にウォン買いが進む展開を想定する。中国の低成長は気がかりとなるも、2月のドル/ウォンは徐々にウォン高推移するものと想定する。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地で定番のパーティ事情』

今日は韓国で最も伝統的なお祭りである“トルチャンチ”を紹介したいと思います。

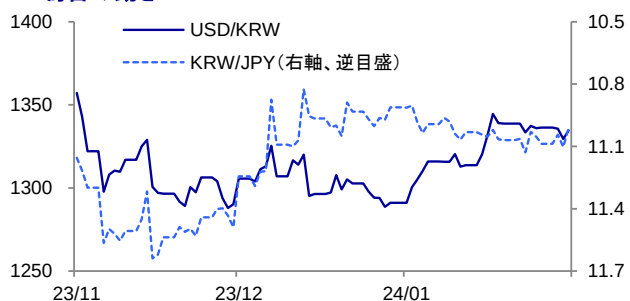
“トルチャンチ”は子供の一歳の誕生日を盛大に行うパーティであり、周年“を指す標準語”トル“と”お祭り/宴“を示す”チャンチ“を合成した単語です。1950年以前までは、韓国での新生児の死亡率は非常に高く、10%を超していたため出生届を遅れて出すことが多かったそうで、今後も生き残る可能性が高いと見なされる1年を過ぎれば盛大に祝うというイベントが今でも続いています。

昔は“トルチャンチ”＝家庭でのパーティだったらしいですが今では宴会場やホテルを貸して行うことが多く、“トルチャンチ”だけを専門とする式場もあります。また、時代の変化とともにあらゆる形式の“トルチャンチ”が登場しているようです。

ただ共通している礼式として、ゲストは祝福金を支払ったり、代わりに金の指輪や金で作られたものをプレゼントします。“トルチャンチ”のハイライトはテーブルに置かれた置物を赤ちゃんに選ばせ何を掴むかによって未来の仕事や予測するイベントです。お金＝お金持ち、鉛筆＝学者、糸＝長寿、聴診器＝医者、電卓＝銀行員、といった調子で占います。両親に聞くと私はマイクを掴み将来K-POPアイドルになることが期待されたそうですが、結局銀行員に落ち着いています。(ソウル資金室 ハ・テソン)

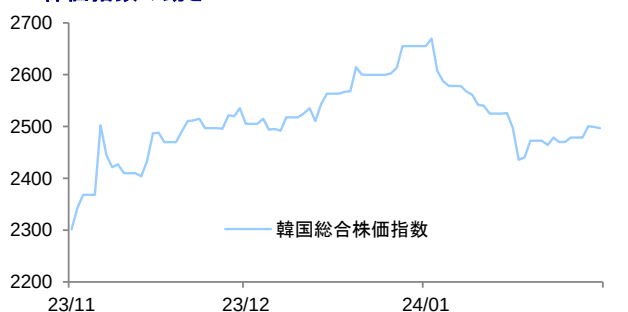
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/29	CPI (前年比)	12月	3.3%	3.2%	3.3%
1/1	貿易収支	12月	6200M	4480M	3800M
1/1	輸出 (前年比)	12月	3.7%	5.1%	7.8%
1/1	輸入 (前年比)	12月	-11.1%	-10.8%	-11.6%
1/10	失業率	12月	2.9%	3.3%	2.8%
1/11	BOK政策金利	-	3.5%	3.5%	3.5%
1/23	PPI (前年比)	12月	-	1.2%	0.6%
1/24	消費者信頼感	1月	-	101.6	99.5
1/25	GDP (前年比)	4Q	2.1%	2.2%	1.4%

台湾ドル相場

予想レンジ: USD/TWD 30.40 ~ 31.40
TWD/JPY 4.55 ~ 4.75

東アジア資金部台北室 久本 和樹

■ 先月の為替相場

1月のドル/台湾ドルは上昇した。

月初の1月2日は30.740でオープン。5日に発表された米12月雇用統計の結果が市場予想対比堅調な結果となったことを受けて、米国における早期利下げ観測が後退する展開に。10日には米国地区連銀総裁のウィリアムズより「現状の景気抑制的な金融政策を維持する必要がある」との発言が聞かれ、米金利の上昇が加速。グローバルにドル買いが優勢となり、ドル/台湾ドルは31.00近辺まで上昇した。

月央になると、13日に台湾総統選が実施された。結果としては総統に民進党の賴清徳が選出された一方、議会選では民進党は過半数確保に失敗。ねじれ国会という結果になったことで、今後の経済政策実行力の低下が意識され台湾株の下落が加速。外国人投資家による台湾ドル売りが見られたことで、31.30近辺まで上昇した。その後、16日海外時間に米FRB理事のウォーラーより「利下げを急ぐべきではない」との発言が聞かれたことで米金利が上昇していた他、17日に発表された中国12月不動産価格が前年比で下落していたことなどを受けてリスクセンチメントが悪化すると、台湾ドル売りが加速し一時31.640まで上昇した。

月後半に入ると、半導体大手企業より四半期決算が発表され始めたが、総じて市場予想を上回る強い結果となっていた。また、2024年の半導体市況見通しも楽観的なものとなっていたことから、半導体株や人工知能関連株への資金流入が加速。台湾加権指数は約1年10か月ぶりの高値を更新し18,000ポイント台まで上昇した。外国人投資家による台湾株買い越し額が大幅に増加し台湾ドル買いが優勢な展開となり、ドル/台湾ドルは31.30近辺まで下落した。その後、25日海外時間に発表された米第4四半期PCEが前回対比下落し1.7%という結果となっていたことを受けて米金利が低下すると、ドル売りが優勢な展開に。月末にかけては輸出企業によるドル売りが見られたことも後押しとなり、31.20台前半で上値重い推移となった。

■ 今月の見通し

2月のドル/台湾ドルは下落を見込む。

1月は過度な2024年の利下げ織り込みを剥落させる形で米金利が上昇していた他、総統選等のイベントを通じ政治リスクの頭も懸念される中、リスクセンチメントが一時的に悪化した局面で、ドル/台湾ドルは上昇する展開となった。しかしドル買いが一巡した後、2024年の半導体市況について楽観的な見通しが浸透すると、台湾株が上昇に転じ、台湾ドルが買い戻される展開となった。

2月のドル/台湾ドルについては、下落する展開を見込む。米国においてはインフレ指標も落ち着きを見せる中、3月の利下げ有無に注目が集まり、ドル売り圧力は強まりやすいであろう。また、2024年は半導体市況の回復も見込まれる状況下、輸出、貿易収支の改善への期待感が高まる場合には台湾ドル買い圧力が強まりやすい。さらに、台湾株の上昇が継続する場合、外国人投資家による投資資金流入が期待され、台湾ドル買い圧力は一段高まるであろう。但し、台湾12月輸出受注は前年同月比▲16.0%と軟調な結果となっており、想定より輸出が伸びない可能性には注意したい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

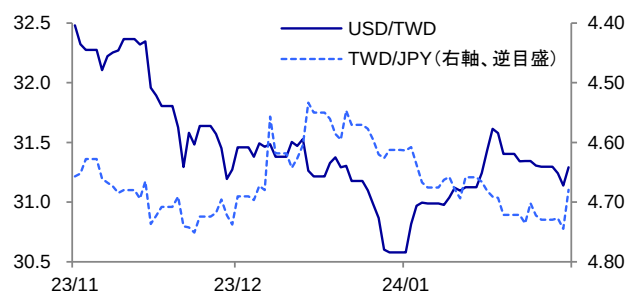
『当地で定番のパーティ事情』

1月13日に実施された台湾総統選にちなんで、台湾の若者の間では「開票パーティ」というものが行われています。台湾は選挙での投票率が70%を超えており、日本の投票率である55%と比べても政治への関心が非常に高いことが伺えます。台湾では戸籍のある場所での投票が義務付けられており、皆さんわざわざ地元に戻って投票する等、労力を惜しまない様子が見て取れます。そんな投票日の夜、台北市のバーには多くの若者が集まり、テレビの前で映画の上映会のように開票速報を見ていました。各政党の特色を踏まえ、互いに議論を交わすなど非常に活気のあるパーティになっています。

また、台湾と日本の親交が深いことはご存じの方も多いかと思いますが、「台日友好パーティ」というものも開催されています。2023年末には1300人近い参加者が集まり、日本の水産品を用いた海鮮料理と、日本酒が振舞われるなど盛大なパーティになっていました。当地では海鮮料理や日本酒はどうしても高価になってしましますが、大変人気になっています。

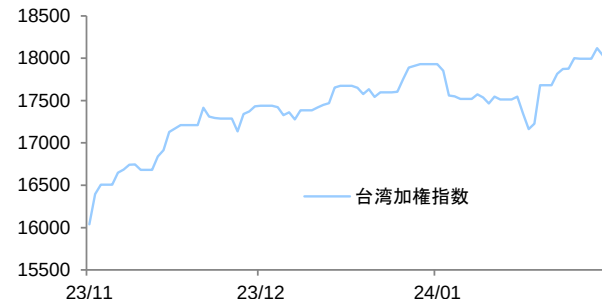
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
1/5	外貨準備高	12月	-	570.60B	567.52B
1/5	CPI(前年比)	12月	2.54%	2.71%	2.90%
1/9	輸出(前年比)	12月	4.90%	11.80%	3.80%
1/9	輸入(前年比)	12月	-7.30%	-6.50%	-14.80%
1/9	貿易収支	12月	8.70B	11.10B	9.80B
1/22	輸出受注(前年比)	12月	-0.25%	-16.00%	1.00%
1/22	失業率	12月	-	3.400%	3.370%
1/23	鉱工業生産(前年比)	12月	-	-3.99%	-2.48%

香港ドル相場

予想レンジ: USD/HKD 7.7900 ~ 7.8300
HKD/JPY 18.20 ~ 19.20

東アジア資金部 Ken Cheung

■ 先月の為替相場

【1月の香港ドル直物相場】

市場参加者が米国連邦準備理事会(FRB)による年内の利下げ織り込みを後退させたことで、1月の香港ドル直物相場は、7.81台から7.82台へ弱含んだ。年初の季節性要因から香港ドル金利が低下したことも相まって、米金利と香港ドル金利の金利差が拡大し、USD買い/HKD売りのキャリートレードが再び活発となった。中国及び香港経済の弱気見通しによって、ハンセン株式指数が年末の終値から13.5%も急落したことも、資金流出を通じて香港ドルの下落圧力に繋がった。中国政府は市場回復のために介入姿勢を強めており、預金準備率(RRR)0.5%の引き下げや、A株を購入する基金の設立が計画していると報じられた。こうした市場に対する支援策のなかでも、ストック・コネクト(中国本土市場との株式相互取引制度)とボンド・コネクト(中国本土市場との債券相互取引制度)の推進は、外国人投資家による対中関連投資を促し、香港の国際的な金融センターとしての地位の維持を期待できる施策であった。しかし、人民元安地合いが強い中では、割安な物価を狙い深センへの短期旅行が好調だったことに対し肝心の香港域内のインバウンド需要の回復は期待外れであった。香港経済の回復は停滞しており、土地価格も低迷する中、香港政府の財政赤字の拡大も投資家の懸念として残る。

【1月の香港ドル金利市場】

FRBによる利下げ期待と、年末資金需要の剥落といった季節要因による香港ドル金利の低下によって、香港ドルHIBORはカーブ全体で低下した。FRBによる3月の利下げ期待は後退していることから、1カ月物HIBORは5.3%から4.6%に、3カ月物HIBORは5.2%から4.7%へと低下し、短期の香港ドルHIBORカーブが順イールドに回帰した。香港ドル直物相場が7.8台で推移する中、香港金融管理局(HKMA)のアグリゲートバランスを450億香港ドル近辺の水準で推移している。また、香港ドルのスワップ金利は、FRBによる年内の利下げ観測を後退したことからの上昇した。短期の香港ドルHIBORの低下と香港ドルスワップ金利の上昇により、香港ドルスワップ金利のキャリー(3年固定金利支払い、3カ月物香港ドルHIBOR受け取り)は減少した。

■ 今月の見通し

【1月の香港ドル直物相場】

我々が想定するFRBの利下げシナリオに基づくと、香港ドル直物相場は7.8付近で推移し、米ドルベッグ制の取引レンジ内7.80を超えて香港ドル高方向に進行する可能性はまだ低いと考えている。2019年の利下げサイクルに目を向けると、取引レンジ内で7.80を超えて香港ドル高方向に持続的に上昇したのはFRBによる利下げが3回実施された後である。現時点でFRBは利下げサイクルの明確なスケジュールを示しておらず、FRBの利下げサイクルが始まる前に、米ドル買い/香港ドル売りのキャリートレードが断続的に発生していく可能性もある。さらに、中国及び香港の株式市場及び香港不動産市場の低迷が、資金流入を抑制する可能性も高い。米ドルベッグ制の下で香港ドルの金利も連動して高止まりしていることから、香港ドル借入需要は引き続き低迷することも予想される。FRBが危機に直面して緊急利下げを実施しない限り、香港ドル直物相場が7.75台に到達するには時間は要するだろう。

【1月の香港ドル金利市場】

FRBの利下げ観測が後退したにもかかわらず、香港ドルの金利は急速に低下し、香港ドルと米ドルの金利差は拡大した。香港ドル直物相場が短期的に7.75台に達する可能性は低いと、HKMAが流動性確保のための香港ドル売り介入を実施することは想定しにくい。また、香港ドルの市中流動性は安定していることから需給逼迫による香港ドル金利の上昇も限定的だろう。割高感のある香港ドル金利に加え、不動産セクターの低迷や経済への弱気見通しにより、香港ドルの借り入れ需要の低下が香港ドル金利の上昇を妨げる可能性は高い。FRBの利下げが開始すると香港ドル金利も連動して低下するだろうが、利下げスケジュールが不透明な中では、香港ドル金利がボラティリティを上昇する展開も想定される。

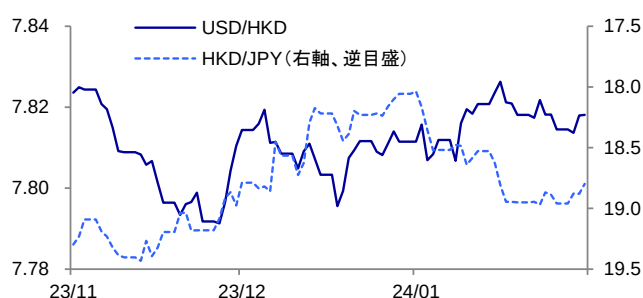
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『香港で定番のパーティー事情』

香港では、休日にパーティーに参加するというのは珍しいことではありません。しかし、コロナ禍によるレストランの閉店等により、ホームパーティーの開催が増加しています。居住スペースは狭いものの、友人の家を訪れて麻雀、ポーカー、ボードゲームなど屋内で楽しめるアクティビティに興じるスタイルが人気です。出前サービスも充実しているため、食事の心配もありません。ホームパーティー以外にも、香港では特別なパーティーも経験できます。例えば夏は特にボートパーティーが人気です。爽やかな夏風を感じ、海の真ん中で素晴らしい景色に囲まれながら冷たい飲み物を飲みつつ、賑やかな雰囲気の中で新しい友人を作れます。ボートパーティーに参加することで、ユニークで特別な時間を楽しむことができるでしょう。

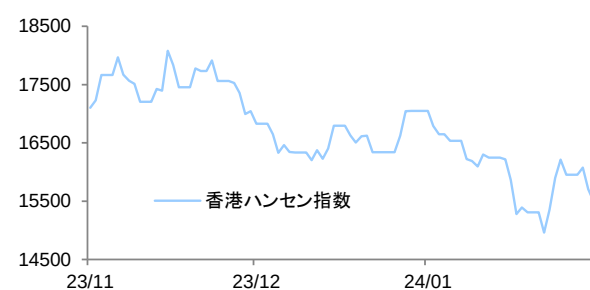
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
1/4	S&P Global Hong Kong PMI	12月	-	51.3	50.1
1/4	小売り売上高(価格,前年比)	11月	11.6%	15.9%	5.6%
1/5	外貨準備高	12月	-	425.5b	424.6b
1/18	失業率	12月	2.9%	2.9%	2.9%
1/22	CPIコンボジット(前年比)	12月	2.5%	2.4%	2.6%
1/25	輸出(前年比)	12月	9.0%	11.0%	7.4%
1/25	輸入(前年比)	12月	7.0%	11.6%	7.1%

中国人民元相場

予想レンジ:	USD/CNY	7.0000	～	7.2500
	CNY/JPY	18.69	～	21.28
	100JPY/CNY	4.7000	～	5.3500

みずほ銀行(中国)有限公司 中国為替資金部 末吉 小絵

■ 先月の為替相場

1月のドル人民元(USDCNY)は上昇。

年明け2日、USDCNYは7.1072でオープン。3日に公表されたFOMC議事要旨において、当面は高水準の政策金利を維持する方針が示されたことに加え、利下げに関する明確な議論が確認できなかったことから早期利下げ観測が後退、ドル買い優勢となり、USDCNYは5日には一時7.17台へ上昇。同日発表された米雇用統計は事前予想を上回ったが、その後のISM非製造業景気指数が事前予想を下回り、7.14台でクローズ。

8日、USDCNYは7.14台半ばでオープン。同日、PBOC高官の融資促進に向け預金準備率を引き下げることがあると発言したことが伝わり、金融緩和観測が高まったことで、10日にかけて7.17台まで上昇。11日、海外時間に発表された米12月CPIは市場予想を上回る結果となり一旦はドル買いで反応するも、米30年債の堅調な入札結果を背景に米金利が低下。ドルの上値が抑えられ、12日は7.16台前後でもみ合いの展開となった。

15日、USDCNYは7.18台前半でオープン。取引開始前に発表されたMLF金利が一部予想に反し据え置きとなったことから元高で反応し、7.16台半ばまで下落。その後は米金利の上昇やFED高官のタカ派的な発言により、過度な利下げ織り込みが後退したことを受けてドル高が優勢となると、16日には7.19台まで上昇。17日に発表された中国の12月主要統計及び第4四半期GDPは市場予想を下回る結果が多く、元安が優勢となったが、節目である7.20が視野に入ると、USDCNY上昇の動きは失速し7.19台前後でのレンジ推移となった。

22日、USDCNYは7.19台前半でオープン。金利据え置きとなったLPRを無難に通過した後、23日に株式市場安定化策に関する観測報道を受けて中国株が反発する動きを見せると元高が強まり7.16台へ下落。24日には預金準備率の引き下げ発表による景気支援への期待感や、全般的なドル売りの流れを受けて一時7.14台半ばまで軟化した。一巡後は次第に水準を回復し、週末26日は7.17台、週明け30日現在は7.18近辺で推移している。

■ 今月の見通し

ドル人民元は足許でドル高元安材料が優勢となっている中、短期的には底堅い展開を予想。

中国の経済データは不動産の下落を筆頭に低調な結果が続く。中国株下落による資本流出圧力は1月に亘って続いた。国内経済回復は今年の年央以降となる可能性がある上、ダボス会議における李首相の発言からは大規模な景気刺激策が見込めず、経済回復期待は徐々に縮小しているようにも見える。

一方で、市場実勢対比元高水準でのPBOC仲値設定は半年以上続いていて、1月のUSDCNY上昇局面でもPBOC仲値は7.10台付近を維持しており、日中の値幅制限の2%レンジ上限である7.25近辺が目先のUSDCNY上値の目途となっている。

他方、米国では堅調な経済データが続く中、FEDが早期に利下げを行う期待は剥落しつつある。1月30日現在、3月のFOMCにおける利下げ織り込みは半分を割り込んでおり、物価水準がFEDの目標水準である2%に下落する見通しがつかない中で、高水準の政策金利維持が続けば、為替市場におけるドルの水準も高止まりが続くこととなるだろう。

また、米大統領選挙が為替レートに与える影響は新たな不確定要素として浮上してきている。3月に控えるスーパーチューズデーに向けて各候補者の政策内容が明らかになる中、中国に対する姿勢や世論の動向には警戒したい。

中国経済に対する弱気な見通しやFEDの利下げ織り込み剥落を受けて現在のドル高元安水準が継続すると予想する。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地で定番のパーティ事情』

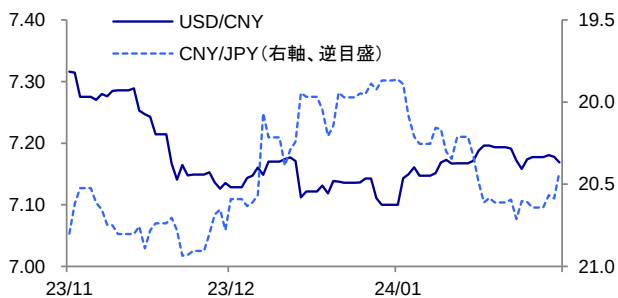
パーティという言葉から思い浮かぶものは当地においてはあまり無いように思います。中国は人口が多いが故に、大人数で集まるのが当たり前になっており、家族や友達と一緒に中華の丸テーブルを囲んでご飯を食べている光景を見かけることが多いです。欧米のようなクラブでワイワイ、という文化も若者の間ではあるようですが、私には縁遠い話です。

家族で集まる”パーティ”について触れると、もうすぐ控える春節が1年で一番盛り上がるイベントかと思います。遠くに住んでいる親族が一同に集まり、ご飯を食べ、麻雀で遊び、子供には紅包(日本でお年玉)を配ります。上海では禁止されているのですが、今年の春節中、雲南省に遊びに行った際には花火や爆竹がバンバンと飛び交っていました。

今年の春節も各地での盛り上がりがニュース等で報じられるかと思うのでチェックしてみただければと思います。

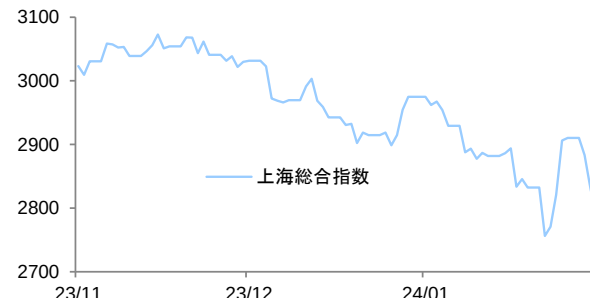
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
12/31	製造業PMI	12月	49.6	49.0	49.4
12/31	非製造業PMI	12月	50.5	50.4	50.2
1/12	貿易収支	12月	\$74.95b	\$75.34b	\$68.39b
1/12	CPI(前年比)	12月	-0.4%	-0.3%	-0.5%
1/12	PPI(前年比)	12月	-2.6%	-2.7%	-3.0%
1/15	MLF1年物	-	2.40%	2.50%	2.50%
1/17	工業生産(前年比)	12月	6.6%	6.8%	6.6%
1/17	小売売上高(前年比)	12月	8.0%	7.4%	10.1%
1/17	都市部固定資産投資(年初来/前年比)	12月	2.9%	3.0%	2.9%
1/17	GDP(前年比)	4Q	5.3%	5.2%	4.9%

シンガポールドル相場

予想レンジ: USD/SGD 1.3200 ~ 1.3700
SGD/JPY 107.50 ~ 113.00

アジア・オセアニア資金部 森谷 友一

■ 先月の為替相場

先月のUSD/SGD相場は上昇する展開となった。

月初2日に1.32台前半でオープンすると、米金利上昇を背景にドル高が進み1.32台後半まで上昇。3日はFRB高官より「追加利上げの可能性はまだ選択肢にある」との発言を受け1.33台まで続伸。5日、米12月雇用統計の良好な結果を受けてドルが急伸し1.33台半ばまで上昇。続いて発表された米12月ISM非製造業景気指数が市場予想を下回ると反落に転じ1.32台半ばまで急落する局面もあったがすぐに1.33台を回復した。

8日から10日にかけて1.33ちょうどを挟んでの方向感に乏しい推移が続いた後、11日に発表された米12月CPIが市場予想を上回ると一時1.33台半ばまで上昇。しかし、上昇は長続きせず12日は再び1.33ちょうどを挟んでのもみ合いとなった。

15日は米国休日で狭いレンジでの推移となったが、16日はウォラーFRB理事のタカ派発言を受けドル高が進行し1.34台まで上昇。17日は中国の冴えない経済指標を受けSGD売りが強まったことに加え、米12月小売売上高が市場予想を上回る結果となると1.34台後半まで上昇。18日から19日にかけてじりじりとドル安が進む展開となり1.33台後半まで水準を下げる展開となった。

22日、アジア時間においては中国株式が軟調推移となったことを受けSGD売り優勢の展開となるも、23日は中国当局が約2兆元規模の株式支援対策を検討しているとの報道を受けアジア通貨高となる中、上値の重い推移となった。24日もしばらく下落基調が続いたが米1月PMIの良好な結果を受け反発に転じた。26日、良好な米経済指標を受けドル買いが進む局面もあったが上昇は一時的となった。

29日、MAS会合が開催されるも市場予想通り金融政策の据え置きが発表され市場への影響は限定的となった。その後、米金利低下の流れを受けてドル売りが進み1.33台後半まで下落すると、30日は1.34近辺での方向感に乏しい推移となった。

■ 今月の見通し

今月のUSD/SGD相場は底堅い推移を予想する。

先月のUSD/SGD相場は大きく上昇する展開となったが、主にUSD要因によるところが大きいと考えている。12月のFOMC会合ではパウエルFRB議長が利下げ議論を開始したことに言及したほか、ドットチャートにおいて2024年中に3回の利下げが示唆されたことを受けて利下げ期待が高まる結果となったが、1月に入ってから複数のFRB高官から早期利下げに対する慎重な発言が相次いだ。昨年末時点では3月会合における利下げはほぼ100%織り込まれていたが、1月29日時点では約50%にまで織り込みが低下している状況。年内の利下げ回数についても織り込みはやや低下しているが依然として5回超の利下げが織り込まれており、ドットチャートにおいて示されている3回と比較すると織り込みが進んでいる状況。今後の利下げ動向については経済指標及びFRB高官の発言を見極める必要があるものの、引き続き利下げに対して慎重なトーンの発言が見られれば、一段と利下げ観測が後退する可能性もありそうだ。

シンガポールについては1月29日にMAS会合が開催されたが市場予想通り金融政策の現状維持が発表された。MASは経済先行きについて「一段の世界的なショックがない限り、国内経済は一段と強まり、さらなる成長が見込まれる。」としインフレ率については「コアインフレ率は今年前半は高止まりする可能性があるが、徐々に低下し第4四半期までに低下する見通し」とコメント。インフレについては警戒を緩めていない様子は伺えるものの、足元では物価上昇圧力が落ち着きつつある状況であることを考えると、現状の政策から一段と引き締め方向に向かうとの見方につながる可能性は高くはないと考えており、SGD高圧力は高まりづらい展開を予想する。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地で定番のパーティ事情』

<National Day Parade>

当地における最大のパーティは国を挙げて行われるNational day paradeです。パレードのために準備期間はおおよそ3, 4ヶ月前から行われていると言われ、最も盛大に実施されるイベントです。1カ月前からは、公道でも予行練習が行われ、交通規制までかかります。夜に打ち上げられる花火も数週間前から予行練習が行われます。本番の1週間くらい前が完成度も高まっており、落ち着いて見やすいので実はお勧めのようです。

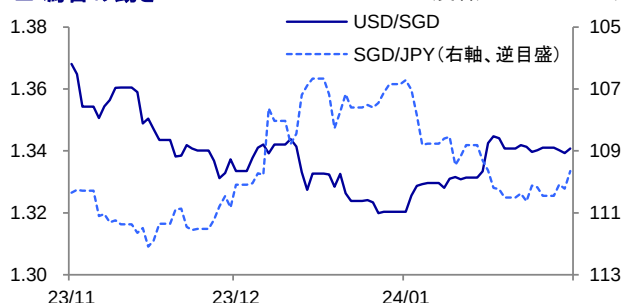
<撈起(Lou Hei)>

シンガポールで伝統的に旧正月のお祝いとして行われるパーティイベントです。日本におけるお節料理にあたる「魚生(Yusheng)」をみんなで食べるのですが、その際のお作法が非常に独特であるため「撈起(Lou Hei)」と呼ばれています。広東語で漁師が網を引き上げる動作を意味する言葉で、大漁で「お金を稼げる」という意味合いがあるそうです。食べ方ですが、まず大皿にサーモンや鯛などのお刺身に大根やニンジン、ツマ、果物、落花生、胡麻などなど、食材を盛り付けます。そして、食べる前に大勢で大皿を囲み、盛られた具材を各自がお箸で高く持ち上げ、新年の願い事を唱えながら一斉に落とします。この動作が、漁師が網を引き揚げる際の動作に似ていることから撈起(Lou Hei)と呼ばれるようになったようです。本日、チームのメンバーで盛大に撈起(Lou Hei)を行いました。腕まくり必須の伝統イベントです。みなさまも、ぜひご挑戦ください！

(アジア・オセアニア資金部 甲斐 貴之)

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
1/2	GDP(前年比)	4Q	1.8%	2.8%	1.00%
1/5	小売売上高(前年比)	11月	2.2%	2.5%	-0.1%
1/17	非石油輸出(前年比)	12月	3.0%	-1.5%	1.0%
1/23	CPI(前年比)	12月	3.5%	3.7%	3.6%
1/26	鉱工業生産(前年比)	12月	1.0%	-2.5%	0.0%
1/29	MAS会合				

タイバーツ相場

予想レンジ: USD/THB 34.70 ~ 36.30
THB/JPY 4.10 ~ 4.20

アジア・オセアニア資金部 バンコック室 鈴木 一勲

■ 先月の為替相場

米利下げ観測が後退して1月のドルバーツは反発。34バーツ台前半で2024年の取引を開始。米12月ISM製造業景況指数が予想を上回り、FRB高官のタカ派なコメントもあって3日には34バーツ台半ばへ上昇。5日、米12月雇用統計は良好ながら、同日発表された米12月非製造業景況指数の内、雇用や新規受注指数が弱く、ドルバーツの上値を押さえた。週明け、タイのセーター首相がタイ中銀に利下げを要請。このヘッドラインがバーツ売りの起点となって35バーツ台前半へ上昇。その後は米金利低下により34バーツ台へと下押しされたが、タイ中銀が15日に金融政策に関する説明会を行うと発表。何らかの金融緩和策が発表されるとの思惑でドルバーツは底堅さを取り戻すも、上値は限定的。

中旬、米12月CPIはほぼ予想通りも、米12月PPIが予想に届かず、35バーツちょうどを中心に大きな動きとはならなかった。15日に開催されたタイ中銀の説明会では、利下げが経済の構造的な問題の解決に寄与しないとして利下げを否定。会見後はバーツ買い優勢だったが、米金利上昇がこれを相殺して引き続き35バーツちょうど付近で推移。FRB理事から急いで利下げする理由が見当たらないとコメントが発せられると、米利下げ織り込みの後退と米長期金利上昇が進み、予想比強い米12月小売売上高も追い打ちをかけて、ドルバーツは約1カ月ぶりに35バーツ台後半を示現。その後も米経済の良好さを示す住宅系指標や雇用系指標が確認されたが、水準的にドル売りも入り易く、レンジ推移となった。

下旬、タイ政府報道官が2023年のGDP伸び率は関係機関の予想値より低い1.8%になると述べるも、影響は限定的。セーター首相の他、財務副大臣や財務省次官からも利下げの必要性が言及され、タイ経済の現状に対する要人からの悲観的な見方が確認された。また、良好な米経済指標も断続的に確認されて米金利が底堅い推移を示したため、1月の高値圏35バーツ台後半を中心に推移。月末週には親イラン武装組織による米軍基地攻撃で中東情勢が緊迫化した他、中国不動産大手の清算命令が香港高裁により下されたが、FOMC前の調整が優先して米金利低下とドル安が進行。30日のオンショア市場では35バーツ台前半で推移した。

■ 今月の見通し

2月のドルバーツは引き続き堅調に推移すると予想。2月7日に今年初のタイ中銀MPCが開催される。先月はセーター首相、財務副大臣及び財務次官からタイ中銀に対して利下げ要請があった。政府要人はタイ経済が「危機」に瀕して、高金利に苦しんでいるとの認識だが、タイ中銀は自国経済が危機下にあるとの認識が無く、経済が低迷しているのは政策金利以外が要因だとセーター首相の利下げ要請後に設けた説明会で利下げを明確に否定。そのため、2月タイ中銀MPCは説明会後の情勢に大きな変化が無く、現状維持がメインシナリオであり、新たな情報を市場が得る可能性は低いと見ている。

タイ国外に目を向けると、本稿執筆時点では1月のFOMCも結果は判明していない。1月にFRBが動くとは予想していないが、市場は3月利下げを50%程度織り込み済。パウエルFRB議長を含むメンバーがどのように直近の米経済を解釈しているか次第で発せられるメッセージが変わるため、FOMC後は見通しが大きく変わる可能性がある。12月の米インフレ率に注目すると、PCEデフレーターは2021年以降初めて3%を下回った一方、個人消費支出は増加しており、賃金が引き続き伸びていると推察できる。PCEデフレーターは全米の個人消費者が実際に使った金額を用いて算出されていることから、FRBメンバーの注目が高く、賃金の伸びに裏付けされた好調な消費が確認されている中、市場に対して利下げのシグナルを与える必要性が低いとFRBが判断する要因になると考えられる。

また、月末付近に入ったヘッドラインでは、ヨルダンの米軍基地を親イラン武装組織の無人機が攻撃して米軍に死者が生じ、中東情勢緊迫化が意識されている。他にも中国不動産大手の清算開始決定により、同国不動産セクターや経済の先行き不透明感がバーツの重しとなるだろう。ポジティブな報道は中国と相互に短期滞在ビザが3月から免除されることだが、春節における中国人の旅行先は近場の香港やマカオがメインという調査結果もあり、タイ観光業が経済の頼みの綱とはなり難い。以上より2月のドルバーツはしっかりとした推移を予想する。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地で定番のパーティ事情』

タイと日本のパーティーを比べて驚いたことは、タイのパーティーは自由解散が基本ということです。日本では何時に始まって何時に終わるとスケジュールが予め決まっていると思いますが、タイでは開始時間こそあれど、その時間通りに来ている人はあまり多くなく、終わるタイミングも会場が閉まらない限り続くようです。

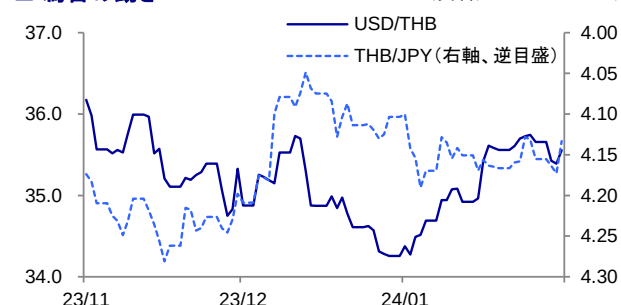
職場のタイ人スタッフが結婚してパーティーを開くという、とてもおめでたい席に招待してもらった機会に恵まれたのですが、パーティー当日は開始予定時間より遅れて到着したと思しき方も多くいました。

加えてもう一つ習慣の違いを痛感したのは、新郎の同僚スタッフがパーティーに恋人を連れてきており、新郎新婦からするとその恋人は全く知らない人にもかかわらず、知り合いかのように挨拶を済ませていたのです。日本では新郎新婦が知っている人だけが参加するという認識ですが、友人の友人は友人のような感覚なのでしょう。正にタイの人々が良く使うマイペンライ(タイ語で主に「気にしない」という意味)の状況でした。

他にもパーティーの音楽は生演奏が多かったり、ダンスパーティーでも無いのに踊る人がいたりタイの人々のパーティーは盛り上がるのが好きなタイの人々の特徴が良く現れていると思います。

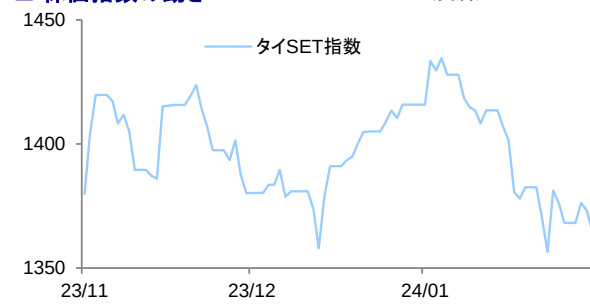
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
1/5	CPI YoY	12月	-0.30%	-0.83%	-0.44%
1/5	CPI コア YoY	12月	0.59%	0.58%	0.58%
1/11	消費者信頼感指数	12月	-	56.0	55.1
1/26	輸出(通関ベース)YoY	12月	6.40%	4.70%	4.90%
1/26	輸入(通関ベース)YoY	12月	7.40%	-3.10%	10.10%
1/26	貿易収支(通関ベース)	12月	-\$1,430M	\$973M	-\$2,400M
1/29	自動車販売台数	12月	-	68,326	61,621

マレーシアリング相場

予想レンジ:	USD/MYR	4.68	～	4.78
	MYR/JPY	30.77	～	31.75
	JPY/MYR	3.15	～	3.25

マレーシアみずほ銀行 内田 壘

■ 先月の為替相場

先月のリングgit相場は月後半にかけて米FF金利の利下げ見通し修正が入る中でドル上昇の展開となり、リングは軟調に推移した。

年初は相場に影響を与えるイベントは特段なかったが、一部市場参加者がFRBによる利下げ見通しを後退させる方向へポジションを傾斜させたと見られ、薄商いの中でドルが急騰した。また4日発表のADP雇用統計など米雇用指標の堅調な結果がドル買いを誘った。中東地域での地政学的リスクの高まりも若干ながらドル買いに寄与。リング円は、能登半島地震を受けて日銀のマイナス金利解除時期が後退するとの憶測からドル円が一時146円台まで上昇。リング円も31円台に乗せた。一方、5日NY時間発表の米雇用統計が堅調だったもののリングgitオンショア市場では特段大きな反応なく4.65を中心としたレンジ推移となった。

中旬にかけてはFRBウォラー理事によるタカ派発言の他、小売売上高や鉱工業生産などの米経済指標も市場予想を上回る堅調な内容となりドル高が進展。更に国内では19日GDP、貿易統計が軒並み軟調な結果となりリングgit安相場を後押しする展開。リングは軟調地合いの中、USD/MYRは4.72を中心とした取引レンジまで上昇した。

下旬については、中国株式市場の下落に伴う市場のリスク回避の動きからリングgitは一段下落。USD/MYRは12週間ぶりの4.75手前まで上昇。24日には馬中銀の政策会合が開催されたが市場予想通りの政策金利3.0%に据え置き。同時に発表されたステートメントではリングgit安水準が現在の国内経済を反映していないとの言及が追加された他は特段目立った材料は無し。22日の12月CPIは市場予想通りの+1.5%。同時に発表された23年通年CPIは+2.5%。22年+3.3%から大幅に低下したが市場の反応は限定的。月末にかけては2/1未明のFOMC発表を控えてマレーシアオンショア市場でも狭いレンジでの取引。月全体で見るとUSD/MYRは約1,400pipsの大幅上昇となった。

■ 今月の見通し

今月は、日米馬いずれの中銀会合も予定されていない月となる。中国旧正月を中旬に控えてマレーシアオンショア市場でも取引参加者が少なくなることが予想される中、低流動性下での値幅を伴った相場変動には注意したい。

国内経済を見ると、中国経済の復調の兆しが見つけられない状況下でマレーシアの貿易統計の減速は続いており、中国観光客による国内経済に対する追い風も未だ期待できる状況にはない。かかる状況下で、国内民間消費が堅調に推移している点が唯一の明るい材料となっているのが実情と言えよう。輸出の伸び悩みにより実需筋のリングgit買いフローは力強さに欠けており、先月に続いて外部環境に振られる展開は続くと考えている。

昨年年末にかけては2024年のドル金利ピークアウト期待によるドル売り新興国通貨買いが進む中、リングgitは堅調に推移した。一方、実際に24年に入ると寧ろリングgitの弱さが目立つ相場展開となっており、その流れを打ち返す材料探しをしているというのが足許の相場環境。冒頭記載の通り2月日は日米馬いずれも中銀会合が予定されておらず、足許のドル高相場を見ていると米国市場でドル利下げ観測後退に繋がる材料探しはやや困難な印象。既に歴史的に相当リングgit安水準であることは明白な事実であり、マレーシア中銀も警戒姿勢を崩さない水準感とは考えられるものの、今月もUSD/MYRはじりじりと水準を切り上げながら、上値の目途を探る展開となるのがメインシナリオと言わざるを得ないだろう。

一方、対円では先月26日発表の消費者物価指数(東京)が2%を割り込む水準に減速する中、次回3月19日の日銀会合でマイナス金利解除などの政策金利変更期待が高まる状況ではなく、ドル円が140円後半でのレンジ推移が見込まれることから、円安リングgit高で高止まりする流れをメインシナリオとして置いている。

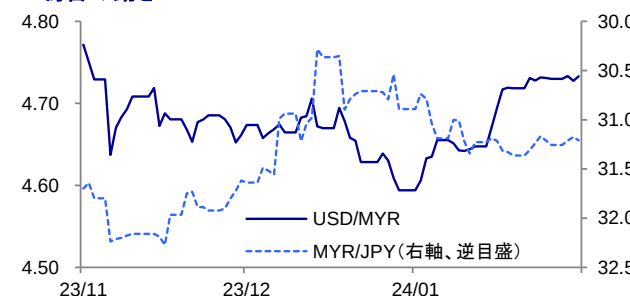
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地で定番のパーティ事情』

マレーシア語での「元気？」という挨拶は、Sudah Makan? (直訳はご飯食べた?/転じて元気?)というくらい、マレーシア人は食べることと集まるのが大好きである。つまり、パーティ、というものは多くのマレーシア人にとって大好物のイベントとなる。マレーシア人の6割はイスラム教徒であり、彼らは1か月月の断食を終えた後、盛大にHari Rayaと呼ばれるお祝いを行う。いわば正月みたいなものだが、これは1か月続くのである。Hari Raya期間中は、オープンハウスと呼ばれる企業・または個人の家で無償でふるまわれるパーティに行き、ひたすら飲み食いを行う、という恒例行事がある。食べて食べて食べまくるのである。筆者は首相公邸で開かれたオープンハウスに参加した。10時開始であるが早い人は日の出前から並び、ひたすら炎天下の中忍耐強く待つ。公邸の中に無数のビュッフェスタンドが立ち並び、カレー、肉、魚、ご飯、スイーツ、ドリンク(アルコールは勿論無。)が無償で提供されており、心行くまで食べることが出来、最後は首相夫婦と握手をして帰るというイベントである。小さな子供にはお年玉もふるまわれ、一族総出で参加するのも珍しくない。毎年3万人近く参加するようだが、食べさせることが人気取りに文字通り直結している、マレーシア独自の文化を垣間見ることが出来た。(日系営業課 黒住)

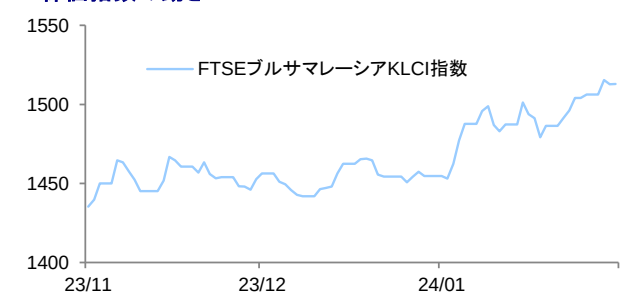
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
1/8	Foreign Reserves	Dec 29	-	\$113.5b	\$112.8b
1/11	Industrial Production YoY	Nov	1.0%	0.6%	2.7%
1/19	Exports YoY	Dec	-5.0%	-10.0%	-5.9%
1/19	Imports YoY	Dec	4.2%	2.9%	1.7%
1/19	Trade Balance MYR	Dec	17.60b	11.80b	12.41b
1/19	GDP YoY	4Q A	4.10%	3.40%	3.30%
1/19	GDP Annual YoY	2023 A	4.00%	3.80%	8.70%
1/22	CPI YoY	Dec	1.5%	1.5%	1.5%
1/22	Foreign Reserves	Jan 15	-	\$115.1b	\$113.5b
1/24	BNM Overnight Policy Rate	Jan 24	3.00%	3.00%	3.00%

インドネシアルピア相場

予想レンジ:

USD/IDR 15700 ~ 16000
 IDR/JPY 0.8929 ~ 0.9434
 JPY/IDR 106.00 ~ 112.00

(注) 100インドネシアルピアあたりの対円レート

アジア・オセアニア資金部 網島 正侑記

■ 先月の為替相場

1月のルピアは下落。
 年初2日、ドル/ルピアは15400台前半で取引を開始。2日に発表されたインドネシア12月消費者物価指数(CPI)の結果は前年同月比+2.61%と市場予想+2.74%を小幅に下回る結果となったが、市場の反応は限定的となり15400台前半から半ばにかけてのレンジで推移した。その後は米国の早期利下げ観測が後退し米金利上昇・ドル高の流れとなる中、5日にかけてルピアは対ドルで15500近辺まで下落した。5日米州時間に発表された米12月雇用統計の結果は市場予想対比良好な結果となったが、その後に発表されたISM非製造業景気指数が市場予想を下回る結果となり、結局翌週8日のドル/ルピアは前週末クローズとほぼ同水準となる15500近辺で取引を開始した。その後は米金利が徐々に上昇する中、ルピアは対ドルでじり安推移。15日、インドネシア12月貿易収支の結果が発表され市場予想を上回る貿易黒字額となったが、市場の反応は限定的。16日、米州時間にウォラー・FRB理事が「以前ほど迅速に利下げしたり急いだりする理由はない」と発言したことを受け、ドル高が一段と進むと翌17日アジア時間にはルピアは一時15600台半ばまで対ドルで下落。同日開催されたインドネシア中銀会合では事前の予想通り政策金利の据え置きが決定されたが、市場の反応は限定的となった。15600近辺での値動きが継続したが、25日に財務大臣が辞任を検討との報道を受け、ルピアは対ドルで下落幅を拡大。途中、インドネシア中銀高官から為替介入を匂わせる発言も報道されたがルピアの下落は止まらず15800台前半を付けた。FOMCを月末に控える中、小幅に下落幅を縮小させ30日には15700台後半まで値を戻した。

■ 今月の見通し

2月のルピアは軟調な値動きを予想。
 31日海外時間にはFOMC会合が予定されており、市場では政策金利の据え置きが予想されている状況(本欄執筆、1月30日時点)。一方で3月会合では50%程度の確率で利下げすると織り込まれている。足元の米国のインフレ率や雇用の状況、直近のFRB高官のコメントを踏まえると3月利下げの必要性は高いとは考えにくく、市場の利下げ期待を調整する為のタカ派的なコメントが出てくるものと考えられ、米金利上昇・ドル高が進展するものと予想する。インドネシアでは2月14日に大統領選が予定されており、現状の世論調査ではプラヴォボ氏が優勢となっている。選挙を前に政治的な混乱が予想されており、影響力を維持しようとするジョコ大統領に反発した閣僚が辞任を検討する等の報道が出ている状況。プラヴォボ氏、もしくは世論調査で2位となるガンジャール氏、どちらの政策も現職のジョコ大統領の路線から大きくは変更しないと見られる中、2月選挙で次期大統領が決定するのであれば政治的な混乱も一時的となり、為替市場への影響も限定的なものとなろう。しかしながら、2月選挙において決着がつかず、6月の再選挙へもつれ込む事態となると、政治的混乱が長期化しインドネシア国内の経済の停滞を招きかねず、ルピア売りが進む可能性もあるか。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地で定番のパーティ事情』

結婚式は当地文化において非常に重要なイベントであり、人生の新たな側面の出発点と考えられているため、誰もがカップルがこの機会を祝うのを手伝いたいと考えている。親戚、知人、同僚、ビジネスパートナーが結婚式に招待される可能性がある。かつて(80年代や90年代のように)、結婚式には、披露宴会場の外に大きな花が飾られていた。あるいは、結婚式のゲストがさまざまな家庭用品を贈り物として持参した。

最近、招待状に「寛大さを軽視することなく、花または贈り物を贈らないでいただければ幸いです」という文言を追加することで、出席者に贈り物や花の展示を持参しないようお願いするもので、贈り物の代わりにお金を求める良い方法。

多くの結婚式の出席者には、到着時に小さな商品(扇子、キーホルダー、その他のアイテム)が渡される。この商品にはご来場の感謝状を添付される。

ほとんどの結婚披露宴では、ゲストは到着し、ゲストブックに署名し、披露宴会場に入ります。会場への道の左右には、同様の伝統的な衣装や正装を着た大家族のメンバーが並んでいる。

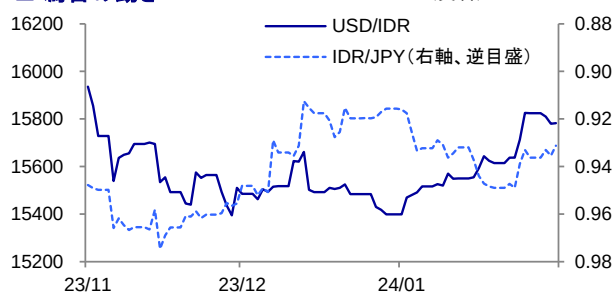
ゲストがステージに上がり、新郎新婦と両親と握手し、そして、ビュッフェテーブルへ。

食事を楽しみながら、多くの出席者の中に知り合いがいれば、おしゃべりしたりしてもよいし、一方、そこに知り合いがいない場合は、新郎新婦と握手をして食事をし、すぐに立ち去ることもオッケー。

(インドネシアみずほ銀行 アストリッド)

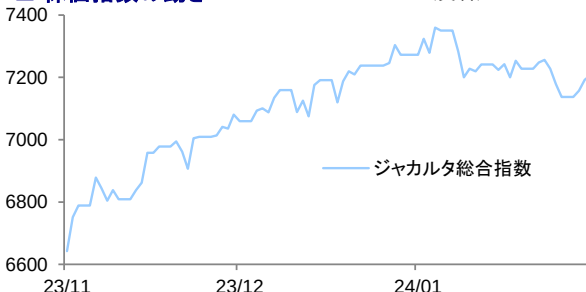
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
1/2	CPI(前年同月比)	12月	2.74%	2.61%	2.86%
1/15	貿易収支(USD M)	12月	1,960	3,300	2,412
1/15	輸出(前年比)	12月	-8.39%	-5.76%	-8.56%
1/15	輸入(前年比)	12月	0.22%	-3.81%	3.29%
1/17	BI 金利	-	6.00%	6.00%	6.00%

フィリピンペソ相場

予想レンジ: USD/PHP 55.00 ~ 57.00
JPY/PHP 0.370 ~ 0.400

アジア・オセアニア資金部 マニラ室 榎 雄一郎

■ 先月の為替相場

米株式下落によるセンチメント悪化や、FOMC議事要旨のタカ派な内容を受けて、アジア通貨に下押し圧力が掛かった一方で12月の比消費者物価指数が前年同月比+3.9%と鈍化基調継続となるも、比中銀はインフレリスクが根強い中、十分に引締めの金融政策を維持する必要があると示したことに支援され、ペソはもみ合い推移が継続。8日にジョグノ財務相が年後半に金融緩和を開始し、年末までに▲100bp利下げをするとの見方を示したほか、11月の比貿易赤字の拡大を受けて、ペソは大幅下落となり、約2か月ぶりに1米ドル＝56ペソ台までペソ安が進み、10日には一時、1米ドル＝56.410ペソまで水準を切り下げた。

その後、大幅ペソ安の反動のほか、米インフレ関連指標の鈍化を受けた、早期利下げ観測再燃から、ドル反落の流れとなり、ペソは1米ドル＝55ペソ台に戻した。11月のフィリピンの海外在留労働者からの送金額は27.19億ドルと前月修正値の29.98億ドルから減少となったほか、米金融当局者らからの早期利下げを牽制する発言や米経済指標の強い結果を受けた米金利上昇から、ドルが反発するも、ペソは1米ドル＝56ペソ付近の水準では底堅さをみせ、アジア通貨の中では相対的な強さが見られ、中旬に入って反発後、1米ドル＝56ペソ手前の水準での狭いレンジでの推移が続いた。

下旬に入り、米利下げ織り込みの剥落から、ドルが押し上げられ、23日にペソは上旬につけた日中安値の1米ドル＝56.410ペソ付近まで再度下落。比中銀のレモナ総裁は1月のインフレが12月から低下する見込みであるものの、インフレの持続的な低下基調が確認できるまでは十分に引締めの政策スタンスを維持すると従来の考えを改めて示したが、ペソへの影響は限定的となり、中国経済の減速懸念や中東情勢の緊張の高まりからセンチメントが悪化し、昨年10月末以来の水準までペソ安が進む局面が見られるなど、軟調地合いは変わらず、月を通してペソは下落基調を辿る展開となった(1月29日時点)。

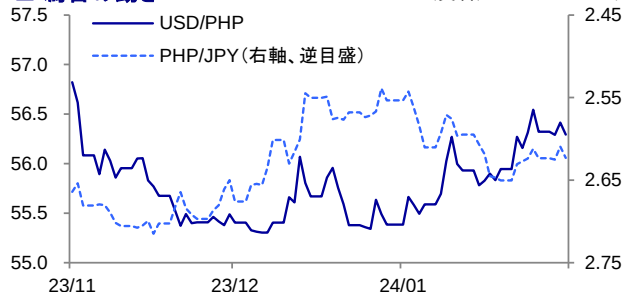
■ 今月の見通し

米金融当局者の政策金利予測では来年3回の利下げが見込まれている一方、短期金利市場は引き続き約5～6回程度の利下げを織り込んでいる。米経済環境は底堅さを見せ、ソフトランディングの可能性が見込まれるなか、米金融当局は年後半の利下げを想定している可能性が高く、次回FOMCでは早期利下げを示唆するものになるとは考えにくく、足元の利下げ織り込みは行き過ぎていると考えられ、米金利にはまだ修正の余地あるとみている。足元の米経済回復力と金融環境の緩和を踏まえると、政策緩和を急ぐ必要性は高くなく、金利低下を受けた物価上昇圧力再燃といった懸念も燃えることから、当局の政策金利予想に対して行き過ぎた市場の折り込みが修正される過程で、ドルが持ち直す展開も想定される。焦点は米利下げのタイミングであり、現行水準から利下げ織り込みが大きく進み、ドルが大幅下落となる余地は限定的との見方のなか、ドルペソは直近のペソ高水準の1米ドル＝55ペソ付近が下値目途となろう。

比中銀は物価上昇リスクが根強い中、引締めの政策を維持すると繰り返し強調しているほか、米金融当局の動向も今後の金融政策決定要因になるとし、米国に先行して利下げに政策転嫁する可能性は低く、当面はタカ派的据え置きを維持する可能性が高く、早期利下げの可能性は想定しづらい。一方でインフレ鈍化見通しを背景に年後半からの利下げ開始の見方が高まっており、足元ペソが弱含んでいるが、昨年の金融当局の防衛ラインとなった1米ドル＝57ペソ付近ではペソはサポートされる可能性が高い。ドル主導の相場の中、ドル/ペソ為替相場は主に米政策金利パスに対する見方に振られるボラティルな展開が続くとの見方は変わらず。また、輸出減・輸入増を背景に、高水準の貿易赤字が継続しているほか、海外在留労働者からの送金の季節性が今後は剥落していくことを踏まえると、需給面ではペソは売られやすい環境となり、ペソの上値を押さえる要因となろう。

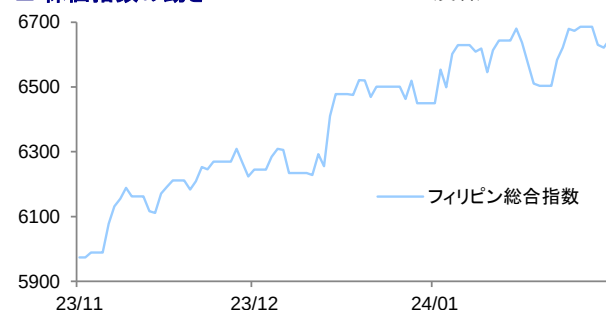
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日 イベント
上記参照

(資料) ブルームバーク

期間	予想	結果	前回

インドルピー相場

予想レンジ: USD/INR 82.80 ~ 83.70
INR/JPY 1.69 ~ 1.81

アジア・オセアニア資金部 インド室 綿引 修平

■ 先月の為替相場

【1月の米ドル/インドルピーは節目83水準を挟んで上下に往って来い】

83台前半水準にて当月取引を開始。月初については、年末年始で市場参加者が少ない状況下、大きな値動きには至らず、USD高圧力に連れられて、一時83.35水準までルピー安の展開。月央にかけては、大口のフロー主導で節目の83水準を割り込む水準までルピー高が進行したものの、インド準備銀行(RBI)からの下支えの為替介入(USD買いINR売り)もあり、底堅い動きに。月末にかけて、徐々に水準感を取り戻し、再び83水準から上値追いの様相の見せたが、83.20水準に近傍する局面にて、RBIからの上値抑えの為替介入(USD売り・INR買い)もあり、上値の重い値動きが継続し、結局、月を通して往って来いの水準にてクローズ(25日時点)。

SENSEXは、73,000水準をしっかりとブレイクし、年初来高値を更新する展開。一方、当該水準からは、利益確定の売りの様相で水準感を調整し、一時70,500水準を下回る局面を見せた。その後は、下値の底堅さも漂わせつつ、上昇基調に転じる動きとなり、再び72,000水準を視界に捉えてきた恰好。

インド経済指標では、12月製造業/サービス業PMIは強弱ミックスの結果に。12月消費者物価指数(CPI、前年比)は+5.69%と、前回の+5.55%から上昇したものの、インフレーターゲート上限である+6%には至らなかった。12月貿易収支は赤字幅は縮小したものの赤字常態化は継続、通貨として売られやすい立ち位置は不変のままに。

■ 今月の見通し

【2月の米ドル/インドルピーは節目83水準にて攻防か】

2月においては、節目83水準を挟んでの攻防の展開を見込む。1月は、当該水準を挟んで往って来いの展開であり、フロー主導の上下動とRBIからの上値抑え・下支え双方の為替介入が相俟っており、総じて大きな値動きが抑制されている恰好。レベル感としての、83~84レンジの目線感は維持しつつ、米国利下げ局面におけるUSD売り基調下での値動きに注視しておきたい。

12月CPIは、前回対比小幅に上昇する結果に。一時のCPI急騰時から、ここもとは徐々に落ち着いた動きとなっており、来月の金融政策委員会(MPC)では、据え置き措置の想定であるものの、かねてからの利上げ効果の見極めフェーズに加えて、CPIの再度急騰時には利上げ選択という、タカ派的な現状維持の方向感に舵を切りつつあるか。

インド国債組み入れに伴い、外国人投資家から証券投資に対しても資金投入に厚みが出始めている状況。加えて、米経済の失速・利下げ局面入りにて、本年後半にかけてルピー高の流れが顕在化する方向感で見ておくと、RBIからの下支えの為替介入や実需勢からのアウトフロー(インドルピー売り)により、中長期的にはルピー安方向に回帰していく想定を、足許は崩してはいない。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地で定番のパーティ事情』

当地ではパーティをしているのは「独身の若者たち」のイメージがあるような気がしますが、

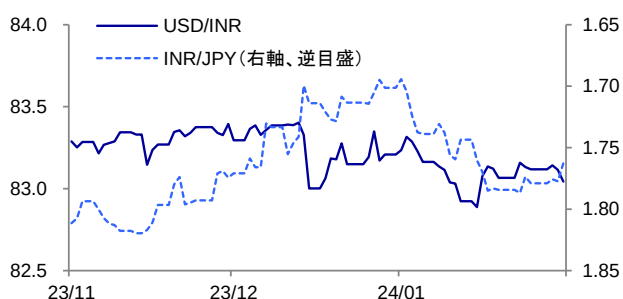
私個人の話にはなりますが、私の周りのインド人友達にはよくハウスパーティーに招待してくれます。毎回ゆるい感じで始まり、特に決まった集合時間もなく、適当な時間に集まり、自分の都合の良いときに帰れる、ゆるいハウスパーティーです。それも誰でもウェルカムなので、毎回行くたびに新しい出会いもあり個人的にはかなり楽しいです。音楽を聴きながら、お酒を飲み、友人が作ったご飯を食べながら、かなり色々なトピックで盛り上がりま

す。宗教や政治の話で熱くなったり、真面目なディベートも始まったりと、興味深い話も多々あり、盛りだくさんなハウスパーティーです。

(インド営業部ニューデリー 七戸)

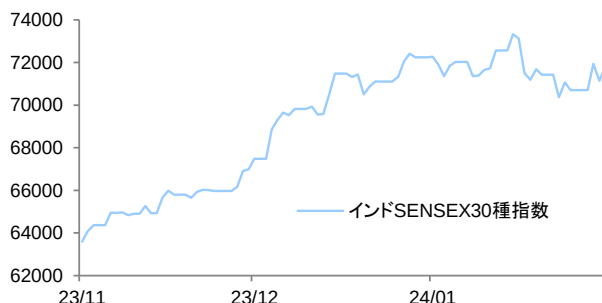
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
1/3	製造業PMI	12月	-	54.9	56.0
1/5	サービス業PMI	12月	-	59.0	56.9
1/12	鉱工業生産	11月	3.50%	2.40%	11.60%
1/12	CPI	12月	5.88%	5.69%	5.55%
1/15	貿易収支(百万ドル)	12月	-20,080	-19,803	-20,587

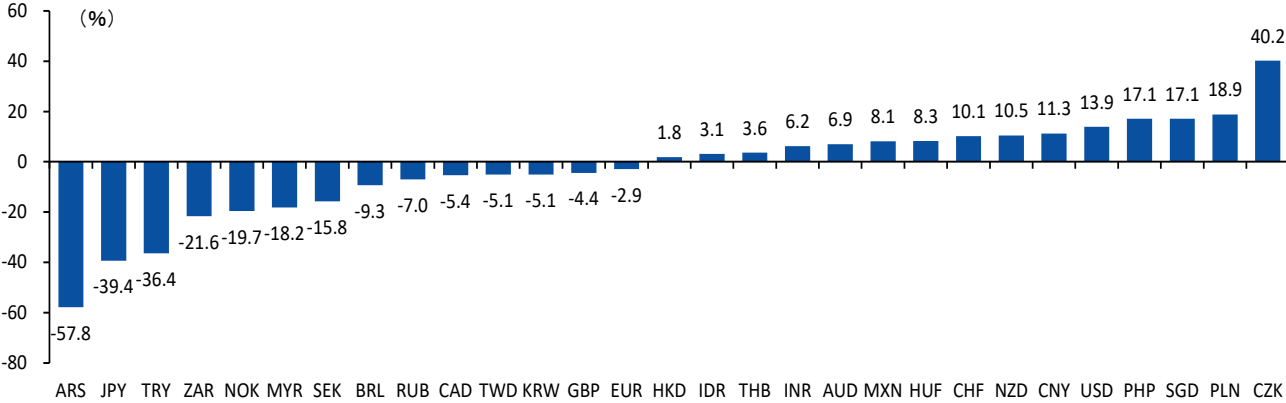
(資料) ブルームバーク

■ 為替市場・株式市場騰落率

	為替市場	2023年末	2024年1月末	騰落率	株式市場	2023年末	2024年1月末	騰落率	USD換算
先進国									
米国	-	-	-	-	NYダウ平均	37689.54	38150.3	1.2%	-
日本	USD/JPY	141.04	146.92	4.2%	日経平均株価	33464.17	36286.71	8.4%	4.1%
ユーロ圏	EUR/USD	1.1039	1.0818	-2.0%	ドイツDAX指数	16751.64	16903.76	0.9%	0.9%
英国	GBP/USD	1.2731	1.2688	-0.3%	ロンドンFTSE100指数	7733.24	7630.57	-1.3%	-1.0%
豪州	AUD/USD	0.6812	0.6568	-3.6%	S&P/ASX200指数	7590.818	7680.718	1.2%	4.9%
カナダ	USD/CAD	1.3243	1.3435	1.4%	S&PTロント総合指数	20958.44	21021.88	0.3%	-1.1%
エマージングアジア									
中国	USD/CNY	7.1	7.1689	1.0%	上海総合	2974.935	2788.548	-6.3%	-7.2%
香港	USD/HKD	7.8115	7.8181	0.1%	香港ハンセン	17047.39	15485.07	-9.2%	-9.2%
インド	USD/INR	83.2088	83.0425	-0.2%	インドSENSEX30種	72240.26	71752.11	-0.7%	-0.5%
インドネシア	USD/IDR	15399	15783	2.5%	ジャカルタ総合	7272.797	7207.941	-0.9%	-3.3%
韓国	USD/KRW	1291.07	1334.65	3.4%	韓国総合株価	2655.28	2497.09	-6.0%	-9.0%
マレーシア	USD/MYR	4.594	4.733	3.0%	ブルサマレーシアKLCI	1454.66	1512.98	4.0%	1.0%
フィリピン	USD/PHP	55.385	56.295	1.6%	フィリピン総合	6450.04	6646.44	3.0%	1.4%
シンガポール	USD/SGD	1.3203	1.3408	1.6%	シンガポールST	3240.27	3153.01	-2.7%	-4.2%
台湾	USD/TWD	30.579	31.293	2.3%	台湾加権	17930.81	17889.56	-0.2%	-2.5%
タイ	USD/THB	34.256	35.555	3.8%	タイSET	1415.85	1364.52	-3.6%	-7.1%

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 実質実効為替レート(REER)の1994年以降の平均からの乖離(2023年12月時点)



■ 実質GDP成長率

	2022Q2	2022Q3	2022Q4	2023Q1	2023Q2	2023Q3	2023Q4	2022	2023
	(前年比%、*前期比年率%)							(前年比%)	
先進国									
米国*	-0.6	2.7	2.6	2.2	2.1	4.9	3.3	1.9	2.5
日本*	4.4	-0.4	1.0	5.0	3.6	-2.9		1.0	
ユーロ圏	4.1	2.4	1.8	1.3	0.6	0.0	0.1	3.4	
英国	3.9	2.1	0.6	0.4	0.3	0.3		4.3	0.3
豪州	3.5	5.8	2.3	2.4	2.0	2.1		3.8	
カナダ*	3.8	1.8	-0.9	2.5	1.4	-1.1		3.8	
エマージングアジア									
中国	0.4	3.9	2.9	4.5	6.3	4.9	5.2	3.0	5.2
香港	-1.2	-4.6	-4.3	2.9	1.5	4.1	4.3	-3.7	3.2
インド	13.1	6.2	4.5	6.1	7.8	7.6		9.1	7.2
インドネシア	5.5	5.7	5.0	5.0	5.2	4.9		5.3	
韓国	2.9	3.2	1.4	0.9	0.9	1.4	2.2	2.6	1.4
マレーシア	8.8	14.1	7.1	5.6	2.9	3.3	3.4	8.7	3.8
フィリピン	7.5	7.7	7.1	6.4	4.3	6.0	5.6	7.6	5.6
シンガポール	4.5	4.0	2.1	0.5	0.6	1.0	2.8	3.7	1.2
台湾	3.5	4.0	-0.7	-3.5	1.4	2.3	5.1	2.6	1.4
タイ	2.5	4.6	1.4	2.6	1.8	1.5		2.6	1.5

(注)インドの年間成長率は会計年度(4～3月)。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 失業率

	23/05	23/06	23/07	23/08	23/09	23/10	23/11	23/12	2022	2023
	(%)								(%)	
先進国										
米国	3.7	3.6	3.5	3.8	3.8	3.8	3.7	3.7	3.6	3.6
日本	2.6	2.5	2.7	2.7	2.6	2.5	2.5	2.4	2.6	2.6
ユーロ圏	6.5	6.4	6.5	6.5	6.5	6.5	6.4		6.7	6.5
英国	4.0	4.2	4.3						3.7	4.0
豪州	3.6	3.5	3.8	3.7	3.6	3.8	3.9	3.9	3.7	3.7
カナダ	5.2	5.4	5.5	5.5	5.5	5.7	5.8	5.8	5.3	5.4
エマージングアジア										
中国										
香港	3.0	2.9	2.8	2.8	2.8	2.9	2.9	2.9	4.3	3.0
インドネシア				5.3					5.9	5.4
韓国	2.5	2.6	2.8	2.4	2.6	2.5	2.8	3.3	2.9	2.7
マレーシア	3.5	3.4	3.4	3.4	3.4	3.4	3.3		3.8	3.4
フィリピン	4.3	4.5	4.8	4.4	4.5	4.2	3.6		5.4	4.5
シンガポール	1.9	1.9	2.0	2.0	2.0	1.9	2.0	2.0	2.1	1.9
台湾	3.5	3.5	3.4	3.4	3.4	3.4	3.4	3.4	3.7	3.5
タイ		1.1			1.0					

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 消費者物価上昇率

	23/04	23/05	23/06	23/07	23/08	23/09	23/10	23/11	23/12	2022	2023
	(前年比%)									(前年比%)	
先進国											
米国	4.9	4.0	3.0	3.2	3.7	3.7	3.2	3.1	3.4	8.0	4.1
日本	3.5	3.2	3.3	3.3	3.2	3.0	3.3	2.8	2.6	2.5	3.3
ユーロ圏	7.0	6.1	5.5	5.3	5.2	4.3	2.9	2.4	2.9	8.4	5.5
英国	8.7	8.7	7.9	6.8	6.7	6.7	4.6	3.9	4.0	9.1	7.3
豪州			6.0			5.4			4.1	6.6	5.6
カナダ	4.3	4.4	3.4	3.3	4.0	3.8	3.1	3.1	3.4	6.8	3.9
エマージングアジア											
中国	0.1	0.2	0.0	-0.3	0.1	0.0	-0.2	-0.5	-0.3	2.0	0.2
香港	2.1	2.0	1.9	1.8	1.8	2.0	2.7	2.6	2.4	1.9	2.1
インド	4.7	4.3	4.9	7.4	6.8	5.0	4.9	5.6	5.7	6.7	5.7
インドネシア	4.3	4.0	3.5	3.1	3.3	2.3	2.6	2.9	2.6	4.2	3.7
韓国	3.7	3.4	2.7	2.4	3.4	3.7	3.8	3.3	3.2	5.1	3.6
マレーシア	3.3	2.8	2.4	2.0	2.0	1.9	1.8	1.5	1.5	3.4	2.5
フィリピン	6.6	6.1	5.4	4.7	5.3	6.1	4.9	4.1	3.9	5.8	6.0
シンガポール	5.7	5.1	4.5	4.1	4.0	4.1	4.7	3.6	3.7	6.1	4.8
台湾	2.4	2.0	1.8	1.9	2.5	2.9	3.1	2.9	2.7	3.0	2.5
タイ	2.7	0.5	0.2	0.4	0.9	0.3	-0.3	-0.4	-0.8	6.1	1.3

(注)豪州は四半期データ。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 経常収支

	2022Q1	2022Q2	2022Q3	2022Q4	2023Q1	2023Q2	2023Q3	2022	2023
	(対GDP比%)							(対GDP比%)	
先進国									
米国	-3.8	-3.9	-3.8	-3.7	-3.4	-3.2	-3.1	-3.8	
日本	3.6	3.0	2.3	1.9	1.5	2.0	2.9	1.9	
ユーロ圏	2.1	1.0	-0.2	-0.6	-0.4	0.3	1.2	-0.6	
英国	-2.2	-3.4	-3.2	-3.1	-1.9	-1.8	-2.0		
豪州	2.2	1.8	0.8	1.1	1.3	1.2	1.2	1.1	
カナダ	0.2	0.3	-0.1	-0.4	-0.7	-1.1	-0.9	-0.4	
エマージングアジア									
中国	2.0	2.1	2.4	2.4	2.2	2.2	1.8	2.2	
香港	12.1	10.6	11.3	10.0	8.8	9.2	8.5	10.0	
インド	-1.2	-1.9	-2.6	-2.4	-2.0	-1.7	-1.0	-2.4	
インドネシア	0.4	0.9	0.8	1.0	1.2	0.7	0.3	1.0	0.2
韓国	4.6	4.1	2.9	1.9	0.6	0.5	1.2	1.8	
マレーシア	3.4	2.7	2.5	3.1	3.0	3.3	2.8	3.1	
フィリピン	-2.8	-4.6	-5.9	-4.6	-4.5	-3.4	-2.5	-4.4	
シンガポール	19.8	20.1	20.3	19.3	18.8	18.5	18.0	19.3	19.1
台湾	15.6	14.9	14.2	13.4	12.1	11.9	12.4	13.4	
タイ	-2.1	-3.1	-3.7	-3.2	-2.1	-0.9	1.2		

(注)インドの年間経常収支は会計年度(4～3月)。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 世界の政策金利

		現在 (%)	政策転換期		最近の政策変更		直近の政策動向	
			日付	水準 (%)	日付	変更幅	日付	決定事項
先進国								
米国	FFレート誘導目標	5.25-5.50	引き締め: 2022/3/16	0.00-0.25	2023/7/26	+25bp	2024/1/31	現状維持
日本	当座預金残高の政策金利	-0.10	緩和: 2008/10/30	0.30	2016/1/29	-20bp	2024/1/23	現状維持
ユーロ圏	預金ファシリティレート	4.00	引き締め: 2022/7/21	-0.50	2023/9/14	+25bp	2024/1/25	現状維持
英国	バンク・レート	5.25	引き締め: 2021/12/16	0.10	2023/8/3	+25bp	2023/12/14	現状維持
豪州	キャッシュ・レート	4.35	引き締め: 2022/5/3	0.10	2023/11/7	+25bp	2023/12/5	現状維持
カナダ	翌日物金利	5.00	引き締め: 2022/3/2	0.25	2023/7/12	+25bp	2024/1/24	現状維持
エマージングアジア								
中国	1年物最優遇貸出金利(LPR)	3.45	緩和: 2012/6/8	6.31	2023/8/21	-10bp	2024/1/17	現状維持
インド	翌日物レポ金利	6.50	引き締め: 2022/5/4	4.00	2023/2/8	+25bp	2023/12/8	現状維持
インドネシア	BI金利	6.00	引き締め: 2022/8/23	3.50	2023/10/19	+25bp	2024/1/17	現状維持
韓国	7日物レポ金利	3.50	引き締め: 2021/8/26	0.50	2023/1/13	+25bp	2024/1/11	現状維持
マレーシア	翌日物金利	3.00	引き締め: 2022/5/11	1.75	2023/5/3	+25bp	2024/1/24	現状維持
フィリピン	翌日物金利	6.50	引き締め: 2022/5/19	2.00	2023/10/26	+25bp	2023/12/14	現状維持
タイ	翌日物レポ金利	2.50	引き締め: 2022/8/10	0.50	2023/9/27	+25bp	2023/11/29	現状維持
ベトナム	リファイナンス金利	5.00	緩和: 2023/3/31	6.00	2023/5/23	-50bp	2023/5/23	-50bp

(注) インドネシア中銀は2023年12月21日に政策金利を7日物リバースレポレートからBI金利に変更

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行